

文部科学省調査研究事業

「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

～通信制における個別最適な学び・協働的な学びの実現と発信 及び
多様な背景を有する生徒に対する校内支援・指導体制の改善～

令和 6 年度（研究初年度）報告書



【生徒が制作した悠ルーム（生徒の居場所スペース）の壁画 P.36～】

神奈川県立横浜修悠館高等学校

目次

I	はじめに	P.1
II	横浜修悠館高等学校について (学びのしくみや重層的支援体制など)	P.2~5
III	調査研究事業計画	P.6~9
IV	令和6年度調査研究事業の内容および成果と課題 ○研究全体の概要	P.10
	○研究内容 1班【通信制における個別最適な学び・協働的な学びの実現に向けた レポート・スクーリングの改善・工夫】	P.11
	国語科	P.12~
	地歴公民科	P.14~
	数学科	P.16~
	理科	P.18~
	保健体育科	P.20~
	芸術科	P.22~
	外国語（英語）科	P.24~
	家庭科	P.26~
	情報科	P.28~
	○研究内容 2班【多様な背景を有する生徒への校内支援・指導体制の改善・普及】	P.31
	トライ教室	P.32~
	悠ルーム	P.36~
	架け橋教室	P.38~
	キャリア・ポート	P.40~
	キャリア活動	P.49~

I はじめに

高等学校においては、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し、主体的・対話的で深い学びの充実に向けた授業改善が求められています。また、通信制課程においては、「添削指導・面接指導における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通じた主体的・対話的で深い学びの実現」が必要であるとされています。通信制課程では、「自学自習」が基本となる、全日制・定時制と比べ「少ない登校日数」という条件の中で、これらを実現するためには、生徒の状況を確実に把握しつつ様々な課題を整理しながら新たな発想をもって改善する必要があります。

また、近年、不登校児童・生徒数が年々増加し続け大きな社会問題となっている中で、通信制高等学校は、不登校傾向の生徒が進学する選択肢にもなっていることや、通信制高等学校に通う生徒の特性や家庭環境等の多様化もさらに進んでいるように思われます。これらの状況は本校においても同様であり、生徒たちが社会的自立に必要な資質・能力が身に付けられるよう、学び直し支援から社会とつながるキャリア支援に至るまで、教育活動全体を通じて個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実が必要であると考えます。

本校6期目の文部科学省研究事業（1年目）では、これまでの5期（令和3年～5年）の研究成果を基に多様な背景を有する生徒の学習ニーズに応えるため①個別最適・協働的な学びの実現に向けた添削課題（レポート）・面接指導（スクーリング）の改善・工夫、②多様な背景を有する生徒への校内支援・普及の2つのテーマを設定しました。今回の研究では、定性的指標、定量的指標を明確に定め、生徒の変容を見取るために全生徒を対象とした定点観測的アンケートの実施や単位修得率のデータ分析などを行いました。それらを基に一人一人の生徒の可能性を引き出すために、研究チームを中心とした検討会議や専門家をお招きした研修会など、様々な視点からの研究を深め、通信制における学習モデルを再構築します。

本校は、通信教育に対する多様なニーズに対応し、「日曜講座」「IT講座」「平日講座」を科目ごとに選べる新しいタイプの公立通信制単独校（単位制による通信制の課程・普通科）として平成20年4月に開校し17年が経ち、開校以来、文部科学省の研究事業に取組んできたところです。

【過去の取組】

平成21-22年：「高等学校における発達障がいのある生徒の支援」

平成24-26年：「高等学校における特別な教育的ニーズを有する生徒の自立及び円滑な社会参加を可能とする教育課程の編成及び指導方法、評価方法の検討」

平成27-29年：「定時制・通信制課程における支援相談体制の構築

　　—外部機関とのネットワークづくりや重層的支援の充実を通して—」

平成30-令和2年：「通信制課程における多様な学習ニーズを支える持続可能な体制の構築」

令和3-5年：「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

　　—通信制におけるICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」の実践と発信
　　及び横浜修悠館高校の協働的な「学びのコミュニティ」の改善普及—

本研究が全国の高等学校通信教育に携わる多くの先生方と共有できることを期待しますとともに、本研究に御指導、御尽力いただきました北里大学海洋生命科学部教授 西原 秀夫様、中央大学文学部特任助教 濱川 幸加様に心から感謝申し上げます。

令和7年3月

神奈川県立横浜修悠館高等学校
校長 米山 教子

II 横浜修悠館高等学校について（学びのしくみや重層的支援体制など）

I 通信制の学びのしくみ

$$,添削課題(レポート)の提出・合格 + ,面接指導(スクーリング)に出席 + ,試験に合格 = \text{単位修得}$$

- 添削課題の数や面指指導の回数は、教科・科目ごとに標準数が定められている。（以下は本校の例）

現代の国語（2単位）：レポート6通、出席2回

体育I（2単位）：レポート2通、出席10回

芸術（美術・音楽・書道・工芸）（2単位）：レポート6通、出席8回

英語コミュニケーションII（4単位）：レポート12通、出席16回

- 生徒は1年間を通し、添削課題に取り組みつつ、面接指導に出席し、試験の合格を目指す。

2 横浜修悠館高校について



- 平成20年創立
- 単位制による通信制の課程普通科
- 在籍生徒数2,310名（令和6年10月1日現在）
- 活動生徒数1,933名（令和6年10月1日現在）

【生徒の特性や課題感】

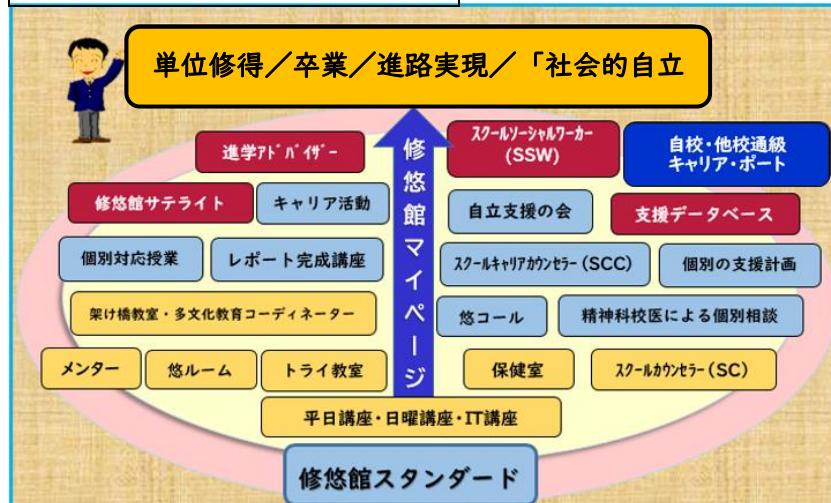
- 対人関係に課題を抱える生徒が多く、スクーリングでの協働的な学び（意見共有など）への苦手意識が強い。
障がい者手帳を取得している生徒や外国につながりのある生徒も多数在籍しており、配慮や支援が必要。
- 一方で、進学を目指す生徒や学習を深めたいと望む生徒も在籍。
- 多数の生徒が在籍しているため、個々の課題や学習ニーズの把握が困難。
- スクーリングでは、一斉指導を行うことが多く、生徒のニーズとのミスマッチが起こりやすい。

3 横浜修悠館高校の学びのしくみ（～令和6年）

- 平日講座 平日（月～木）に登校。豊富なスクーリング機会をいかし、学習を進めたい生徒が対象。
平日に登校する機会を増やし、丁寧できめ細かな面接指導を行う。
- 日曜講座 日曜に登校。主に平日は仕事等をしているなど、自学自習を基本とする生徒が対象。
- IT講座 日曜に登校。レポートをオンライン上で提出（平日・日曜は紙）する。
主に入院などで登校が困難な生徒が対象。

※令和7年度から、IT講座を平日・日曜講座に統合し、全ての講座でレポートをオンライン化。

横浜修悠館高校の重層的な支援体制



- 階層構造をなす様々な支援プログラム
- 生徒が必要な支援を活用し、自ら行動できるようになることを目指す本校の支援システム。

平成30年度～令和2年度に構築・整備

平成27～29年度に構築・整備

平成21～26年度に構築・整備

開校時からの支援システム

開校時からの支援システム

○メンター

- ・担任以外に相談しやすい教職員を生徒が指名し、登録する制度。
- ・生徒は担任に話しづらいことなどを、メンターに相談することができる。
- ・相談できる窓口が複数あることで、安心して学校生活を送ることができるようにすることを目的としている。

○トライ教室（P.32～35）



- ・学習支援が必要な生徒をマンツーマンで指導。
- ・週3日（月水木）スクーリング後に実施。
- ・学習支援ボランティア（※YSK サポーター）が中心となって生徒を支援。
- ・不登校等で学習面に課題のある生徒に、これまでの「学び直し」やレポートを完成させるための支援をしている。

○悠ルーム（P.36、37）



- ・生徒が「落ち着いて過ごせる場所」として常設。
- カームダウン・クールダウンスペースとしての役割も担う。
- ・教職員または学習支援ボランティア（※YSK サポーター）が常駐
- ・より安心できる環境を整え、利用生徒を増やすために改修（令和6年～）
- ・ラボット（コミュニケーションロボット）の導入（令和6年～）

○架け橋教室（P.38、39）



- ・外国につながりのある生徒を支援する教室。
- ・多文化教育コーディネーターが中心に生徒を支援。
- ・言語の違いによる学習課題に対する支援。
- ・外国につながりのある生徒を取り巻く環境に対する多面的な支援。
- ・「コミュニティ」としての役割。

○保健室

- ・養護教諭1名と非常勤養護教諭1名（29時間/週）
- ・生徒にとって、よろず相談の場、心を落ち着かせる場、学校に来たらまず立ち寄る場となっている。
- ・時間割が生徒によって違うため、常に利用生徒がいる。
- ・令和6年利用者数（1月末まで）は4073名
例) 5月総利用者数 683名（内科：28名 外科：53名 こころ：356名 その他：246名）

○スクールカウンセラー（SC）

開校時より、拠点校としての配置を受け、週に1日来校。

※YSK サポーター：学習支援ボランティアとして、生徒の学習をサポートをお願いしている。

本校では YSK（横浜修悠館の略）サポーターと呼んでいる。

平成 21～26 年度に構築・整備した支援システム

○悠コール

生徒、保護者の悩みに対する専用電話。教職員が電話相談に対応する。

○精神科医による個別相談

精神科校医が個別の相談に対応する。

○個別対応授業

- ・様々な理由で学習を進めることが困難な生徒について、本人、保護者、学校、相談機関等が連携。
- ・本人と保護者の承諾のもと、「個別の支援計画」を立てて指導を行う。

○レポート完成講座

- ・補習講座（スクーリングの出席にはならない）
- ・週 2 日（月木）スクーリング後に実施。
- ・レポートでつまづいた時、スクーリングに出席できなかった時に教員からの指導を個々に受けることができる。

○スクールキャリアカウンセラー（SCC）

- ・進路指導室に産業カウンセラー有資格者が複数名常駐。
- ・体系的な就職支援を行なう。

○自立支援の会

特別な支援を要する生徒の自立と社会参加を視野に、各種支援制度や相談機関、福祉サービス活用方法等について保護者に情報提供を行う。

○キャリア活動（学校設定教科「キャリア」における学校設定科目）(P.49、50)



- ・キャリア活動 I C：就労に向けた支援、指導を行う講座
【写真：職場見学の様子】

- ・キャリア活動 II C：就職活動に向けた準備講座
- ・キャリア活動 J：外国につながりのある生徒の総合支援としての講座

○修悠館スタンダード

- ・「発達障がいの生徒にとって無いと困る支援は、全ての生徒にとってあると便利な支援となる」がコンセプト。
- ・スクーリング、レポートのユニバーサルデザイン化（文字のフォントやサイズ、色使いなど）
→全教職員に冊子として配布し、組織的に統一。
- ・学習環境、生徒が過ごす環境の整備（教室環境の整備、掲示物の整備、スロープの整備など）

平成 27~29 年度に構築・整備した支援システム

○修悠館サテライト

- ・連携する「湘南・横浜若者サポートステーション」のサテライト教室。
 - ・週に3日開室。若者支援専門の相談員が常駐。
 - ・働くことやコミュニケーション等に課題を抱える生徒が利用。卒業後も利用できる。

○進学アドバイザー

- ・進路指導室で教諭経験のある相談員が、進学に関する助言をする。

○スクールソーシャルワーカー (SSW)

- ・週に 2 日程度来校。
 - ・困難を抱える生徒に対して、「環境への働きかけ」や「関係機関とのネットワークの構築」などを行い、問題行動の未然防止や早期解決を目指す。

○支援データベース（DB）



- ・入学時から生徒の支援に必要な情報を蓄積、共有するシステム。
 - ・担任、教科担当、SC、SSWなどが生徒対応した際に、共有すべき内容をデータベースに記録。

平成 30 年度～令和 2 年度に構築・整備

○通級・キャリアポート (P.40~48)



- ・通級による指導。
 - ・学習、生活上の困難を改善、克服するための「自立活動」に相当する。
 - ・キャリアポートは本校の呼び方で、就労など生徒の進路に向けたポート（港）のような役割を目指したいという想いが込められている。
 - ・本校では、生徒個々の実態に応じ、教室で行う学習活動と校内外での様々な体験活動を行っている。

【写真：体験活動 じゃがいもの収穫の様子】

○修悠館マイページ



- ・本校独自の学習支援ポータルサイト（e-ラーニングシステム）
 - ・生徒が自身の端末で、「時間割」「出席・レポート提出状況」や「レポートの解説動画」を見ることができる。
 - ・教員への個別相談や、classi（株）の学習動画につながる機能も備える。

Ⅲ 調査研究事業計画

1 調査研究課題名

「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

～通信制における個別最適な学び・協働的な学びの実現と発信 及び

多様な背景を有する生徒に対する校内支援・指導体制の改善～

2 調査研究の目的

多様な背景を有する生徒の学習ニーズに応じるため、次の2点を研究の目的とする。

◎個別最適・協働的な学びの実現に向けた添削課題（レポート）・面接指導（スクーリング）の改善・工夫

多様な入学動機や進路希望、学習経験など様々な背景を有する生徒が在籍する現状に対し、通信制の特性を生かしたオンラインでの添削指導やオンラインスクーリングのあり方を研究し、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていくことを目指す。また、通信制における協働的な学びの実現に向けて、ＩＣＴのさらなる活用の仕方や面接指導と添削課題との効果的な連携の仕方を模索する。

◎多様な背景を有する生徒への校内支援・指導体制の改善・普及

在籍する生徒が多様な背景を有していることを踏まえ、生徒同士が協働しながら人間関係つくりあげるために必要な支援や指導のあり方を検討するとともに、校内体制を改善し、生徒自身が適切な支援や学習形態を選べるシステムの構築を目指す。

3 調査研究の内容・方法・実施体制

(1) 調査研究の内容・方法

◎生徒の実態に応じた指導・支援に向けた調査・分析

生徒の学習面、対人課題を調査する定点観測的アンケートの作成・実施

→生徒の実態、学習ニーズを捉えたうえで、レポート・スクーリングの改善や校内支援・指導システムの構築を目指す。また、生徒個々の変化を追うとともに、全体の変化も追い、研究の評価の一端とする。

◎個別最適・協働的な学びの実現に向けた添削課題（レポート）・面接指導（スクーリング）の改善・工夫 に向けて

①探究的な学びを取り入れたレポートの作成とオンライン化

- ・オンラインの特徴を利用したレポートを各教科で工夫
- ・自ら問い合わせ立てるなど、生徒が主体的に学びを深められる課題の設定
- ・個々の学習状況に合わせ、生徒自身が学習内容や学習方法を選択できる形式を模索

②スクーリング展開の工夫やＩＣＴの活用

- ・個々の学習状況（理解度、意欲など）によって参加するスクーリングを選択できる形式の模索
- ・協働的な学びの実現に向けたＩＣＴの活用方法の検討
- ・スクーリングのオンライン配信と効果的な指導方法の検討（R7年度以降に検討）

→生徒の取り組み（スクーリングの様子や添削課題の記述）やアンケート結果、単位修得率等の変化から効果を検証

◎多様な背景を有する生徒への校内支援・指導体制の改善・普及 に向けて

○横浜修悠館高校の支援システムの検証・改善

- ・重層的な支援システムの継続的な運用 + アンケート結果を踏まえた改善策の検証、実施
- ・支援が必要な生徒を支援システムにつなげる工夫

→支援システムを利用する生徒の取り組みやアンケート結果、出席率等の変化から効果を検証

(2) 研究の実施体制

○校内研究チーム

すべての教科から1～3名のメンバーで構成。

データ分析班、スクーリング・レポート改善班（1班）、支援体制の改善班（2班）に分かれる。

週に1回程度の定例ミーティング（R6：火曜15:30～16:00）を実施。

校内の企画会議や各分掌と連携しながら組織横断的な研究を目指す。



【写真：定例ミーティングの様子】

全体ミーティング、班ごとのミーティングなど、目的に応じて実施研究メンバーである管理職（教頭）も参加する。

データ分析

レポート改善 スクーリング改善

校内支援・指導 体制の改善

学習ニーズ・生徒の実態把握

- ・定点観測的アンケート
- ・単位修得率等のデータ分析

個別最適・協働的な学びに向けて

- ・レポート・スクーリングのあり方検討
- ・「深める」問題の検討

個別最適な支援・指導を目指して

- ・学びのコミュニティの改善
- ・生徒の実態・課題の可視化

○検討会議委員

北里大学 海洋生命科学部教授 西原 秀夫

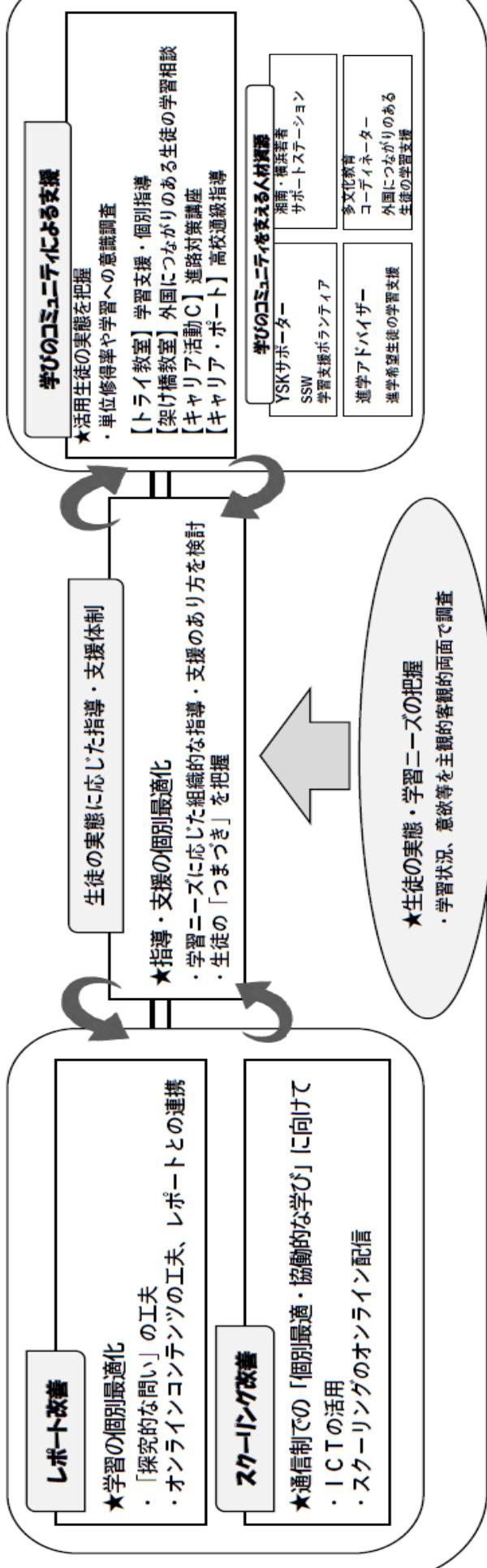
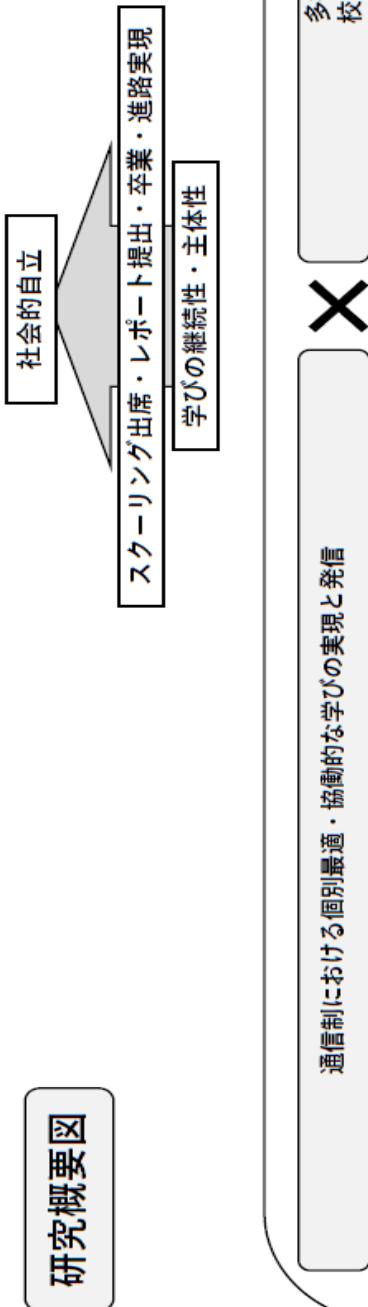
中央大学 文学部特任助教 濑川 幸加

★年に4回の検討会議において、研究への指導・助言を行う。

○研究を支える人材資源

- ・YSK サポーター：学習支援ボランティアによるトライ教室・悠ルームなどの学習支援
- ・湘南若者サポートステーション：修悠館サテライトで生徒の相談対応など
- ・進学アドバイザー：進路指導室（キャリアガイダンスルーム）で進学指導
- ・多文化教育コーディネーター：架け橋教室で外国につながりのある生徒を支援

研究概要図



多様な背景を有する横浜修悠館高校の生徒
不登校経験、身体・精神・知的・発達等の障害、ひきこもり、長期入院、外國につながり、上級校への進学希望

学習環境の整備・ICT活用環境の整備
(オンラインでのレポート指導・スクーリング配信)

横浜修悠館高校が積み重ねてきた支援体制

4 研究の効果測定等の方法

◎個別最適・協働的な学びの実現に向けた添削課題（レポート）・面接指導（スクーリング）の改善・工夫

«定性的指標»

「探究的な学びを取り入れたオンラインレポートによる学習で、
生徒の学習意欲や他者と協働して学びを深めようとする姿勢はどのように変容したか。」

- ・探究的な学びに対する生徒の解答やスクーリング中の解答分析
- ・生徒のスクーリング中の取組の様子を観察

«定量的指標»

「探究的な学びを取り入れたオンラインレポートによる学習や各教科でのスクーリング実践の工夫により、
前年度と比べどのような効果があったか。」

- ・レポートの提出総数の推移
- ・スクーリング出席回数の推移
- ・単位修得率の推移

◎多様な背景を有する生徒への校内支援・指導体制の改善・普及

«定性的指標»

「生徒の学習意欲や他者と協働して学びを深めようとする姿勢はどのように変容したか。」

- ・学びのコミュニティを活用する生徒のレポート内容
- ・生徒に対するアンケート調査（主に自由記述欄）

«定量的指標»

「前年度と比較し、学びのコミュニティの活用によりどのような効果があったか。
また、これまで活動できなかった生徒の学習状況にどのような効果があったか。」

- ・レポートの提出総数の推移
- ・スクーリング出席回数の推移
- ・単位修得率の推移
- ・学びのコミュニティ活用生徒に対する学習意識アンケート

IV 令和6年度調査研究事業の内容および成果と課題

研究全体の概要

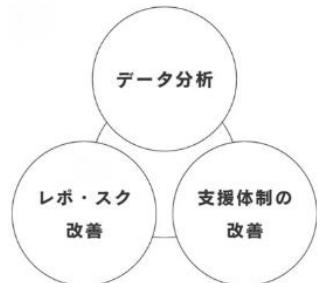
I 研究を進めていくうえでの課題意識



「多様な生徒が在籍する」ということは分かっているものの、「誰がどのような課題を抱えているか」は把握しきれていない現状があった。

多様な背景を有する生徒が在籍する横浜修悠館高校において、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていくためには、生徒の実態や学習ニーズの把握が必要と考えた。

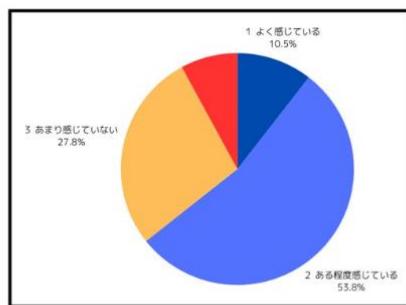
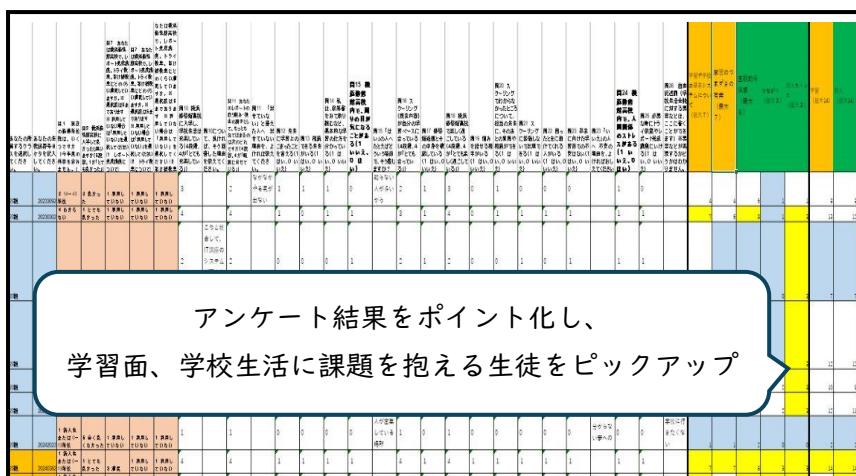
そこで、「定点観測的アンケート」を作成・実施することで「生徒個々の変化」と「学校全体の変化」を分析し、レポートやスクーリングの改善、支援システムの改善につなげることを目指す。



2 定点観測的アンケートについて（詳しくはP.31）

アンケートの概要

- ・「学校生活アンケート」として実施
- ・学習面のつまずきに関する質問 × 8問
- ・学校生活（おもに対人関係）に関する質問 × 8問
- ・実施時期：毎年10月、2月
- ・検討委員の助言を参考に作成。



(例) この半年、学習面での成長を感じていますか？

各質問項目については
全体の動向調査にも活用

3 これまでの研究と今年度の研究について

1～4期	<ul style="list-style-type: none"> ・重層的な支援体制の構築 ・修悠館マイページの活用方法の検討
5期	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTを活用した「主体的・対話的で深い学び」の実践 ・学びのコミュニティの改善
6期	<ul style="list-style-type: none"> ・通信制における「個別最適な学びと協働的な学び」 ・校内支援・指導体制の改善
【研究1年目の取り組み】	
①「個別最適な学び」にフォーカスしたレポートづくり、スクーリング実践 ②定点観測的アンケートの作成と実施 ③校内支援・指導体制の改善	

本校では、開校当初から本研究（文部科学省委託事業）に取り組んできた。基本的には3年で一区切りとなり、校内では、「文科～期」と呼んで活動してきた。今年度からは「文科6期」となる。

これまでの研究の積み重ねの上に、今年度は、特に「個別最適な学びの実現」にフォーカスし研究に取組んだ。

I 班 通信制における個別最適な学び・協働的な学びの実現に向けたレポート・スクーリングの改善・工夫

I 令和6年度の研究の方向性

- ・研究テーマに関する論文や書籍の調査、他校訪問を通してレポート及びスクーリングの改善方法を検討する。
- ・検討内容に応じた実践を行い、その成果の集積と共有を通して研究テーマに対する学校全体の意識向上を図る。

2 令和6年度の活動の概要

論文や書籍を通して研究テーマに対する理解を深め、それをもとにI班を中心に校内で共通理解を図り、レポート・スクーリング改善を進めた。研究テーマのうち、「協働的な学び」については文科5期までの研究で既に多くの実践例が蓄積されているため、文科6期ではそこに「個別最適な学び」の要素を加えた実践が多く展開された。

多くの実践の中で、特に学習段階に応じてスクーリング展開を分ける取組に注目が集まった。年度当初に一部の教科で先行実施され、スクーリングの互見月間（前期・後期で2カ月ずつ実施）などを通して次第に多くの教科にその流れが広がった。後期に入ると、学習手段や生徒の興味関心で分けるなど、各教科の特性を生かした様々な実践が展開された。

レポートについても令和7年度のオンライン化を踏まえながら様々な改善が行われた。例えば解答方法について、スタイラスペンなどによる手書き入力、キーボードによるテキスト入力などから生徒が自らの特性に応じて適したものを選択できる仕組みを導入した。書字に特性のある生徒にとっては解答方法の多様化により、能力を最大限に生かして学習に取組むことができるようになると見込まれる。

校内で研究テーマに対する一定の共通理解が得られたこと、手探りながら多くの実践が集積されたこと、レポートという統一された形式の中で「個別最適な学び」の一部を仕組み化できたことなどが成果と言える。

3 各教科で行われた実践の概要（次頁以降で各教科の詳細な実践を掲載）

テーマ	種類	該当教科	実践の概要
個別最適な学び	学習段階別① (2つのコースを設定)	国語科・地歴公民科	レポート問題の自学自習を支援するコースと協働的な学びを通して基礎知識の活用・深化を図るコースを設定。
	学習段階別② (個人に合わせた課題設定)	数学科	学習状況の振返りをもとに、学習段階に応じて多様に設定された課題から任意のものを選択可能。
		保健体育科	個人の課題や考え方へ応じて、上達させたい技術を選択して記述する課題を設定。
	学習手段別	外国語科	ChatGPTとのやり取りを通して、生徒の学習段階に合わせた出題やコミュニケーションの機会を提供。
		国語科・外国語科	コミュニケーション方法について、ICT活用した間接的対話と直接的対話から選択可能。
	保健体育科		学習の単位を個人、ペア、グループなどから選択可能。
	興味・関心別	理科・保健体育科・芸術科・家庭科・情報科	生徒個人の興味・関心や課題意識に応じて多様な課題を設定。
協働的な学び	ICT活用型	全教科	同期・非同期いずれにも対応した双方向的なコミュニケーションを基本としているが、メタバースを活用した実践（英語科）など、先進的な事例も一部で見られた。
	直接的対話型	国語科・外国語科・芸術科	ペアワークによる対話や教え合いの機会を設定。
		地歴公民科・理科・保健体育科	生徒複数人による探究学習や発表の機会を設定。

◆課題点と解決に向けた方向性

(1) 課題点

- ・スクーリングにおいて生徒間のやり取りが少なく、教員からの一方的な説明に終始しがちである。
- ・基礎的な内容を学習したい生徒と発展的な内容を学習したい生徒が存在する中で、どのように指導を行うか。

(2) 解決に向けた方向性

- ・異なる他者の意見に触れ、視野を広げるために「協働的な学び」を実践する。そのためにＩＣＴ機器を活用する。
- ・生徒の希望に合わせたコース制を導入し、一人ひとりが希望する学習内容を選べるようにする。

◆今年度の取組

(1) 文学国語A

①実践方法

コース制によるスクーリングの実施。芥川龍之介の「鼻」を、計3回のスクーリングで学習した。そこではレポートの問題のみ学習する基礎コースと、レポートの問題だけでなく、作品のより深い内容も学習する発展コースに分かれた。どちらのコースで学習をするかは、生徒一人ひとりが自由に選べるものとした。さらに、火曜3限に2展開しているAグループと、水曜4限に2展開しているBグループの2グループに分かれて、発展コースでのスクーリングでそれぞれ異なった「協働的な学び」を試みた。その内容を以下の表にまとめた。なお、基礎コースの内容に関しては差異を設けていない。

	コミュニケーション方法	学習方法	備考
A	アプリによる文字形式	Padletを使用し、意見発表及び意見交換等	Padletへの意見の記入は全員匿名とした
B	対面による口頭形式	ペアワークによる、音読や意見交換等	意見発表、共有の補助としてPadletを使用した

②実践の成果

- ・Aグループでは、平均して発展コース15名、基礎コース10名ほどの比率となった。本文の理解に関する問い合わせを教員から投げかけ、Padletに生徒一人ひとりが意見を入力し、その後に全体で共有を行った。「周囲の人々が内供へ向けた態度は妥当か否か」という二択の問いは、賛成派、反対派に関わらずアプリ上で活発な意見交換が見られた。
- ・Bグループでは、平均して発展コース5名、基礎コース20名ほどの比率となった。発展コースの生徒は、積極的な発言やペアワーク等を行った。Padletに生徒一人ひとりが意見を入力し、全体で共有後、ペアでなぜそのように思ったのかを説明し合うという、アウトプットを重視した活動を行った。その結果、スクーリング終了後も教科書本文の内容について生徒同士で議論をするという光景が見られた。目の前の相手とリアルタイムで意見交換をするという活動が、生徒の知的好奇心を刺激していることが窺える。



意見発表及び意見交換
(A グループ)



振返り
(A グループ)



意見発表及び振返り
(B グループ)

- ・今回の学習活動における、A グループと B グループの成果と反省点を以下にまとめる。

A グループの成果と反省点

成果	他者と対面でコミュニケーションを取ることに抵抗がある生徒でも、アプリケーションを用いた「協働的な学び」では主体的に学習に向かう姿勢が見受けられた。また、他者の意見を受けて自分の考えを形成し発表するという、双方向の学びを実現できた。
反省点	生徒間の意見交換に予定よりも時間を割いてしまい、最後の振返りができなかった。自身の意見を記入する際、多くの時間が必要な生徒が多数いるため、教員による時間管理を徹底するべきだった。

B グループの成果と反省点

成果	対面で直接コミュニケーションを取ることにより、生徒間の関係性を築けた。スクーリング終了後も作品の内容についての議論を交わすほど学習意欲が高まった。互いの意見を交換することにより、生徒の学習意欲を促し、知識を深めると共に、学習内容を生徒一人ひとりの中に落とし込むことできた。
反省点	口頭でのコミュニケーションに苦手意識を持つ生徒が多く、発展コースが少人数となってしまった。他の生徒に対して発展コースに興味を持たせる、または挑戦するための声掛けや働きかけを行うべきだった。また、Padlet をより多くの場面で活用し、生徒の意見をまとめることに役立てるべきだった。

- ・両グループともに、生徒自身で答えを導き出そうとする主体的な姿勢で学習に臨んでいた。中には、他の生徒にとって重要な気づきとなるであろう鋭い意見も見受けられた。生徒間の意見発表、交換といった「協働的な学び」は、通信制高校においても「深い学び」に繋がると感じた。
- ・両グループを比較すると、B グループの方がより効率的に学習成果を挙げられたように感じる。口頭でのコミュニケーションは、文字よりも短時間に多くの意見をやり取りできることから、生徒一人ひとりの理解や考察を深める機会が増える。しかし、本校にはそれらを苦手とする生徒が数多く在籍している。そのような生徒も、A グループのような文字でのコミュニケーションを主とした学習形態であれば、積極的に意見を述べることができ、他者との「協働的な学び」に参加することできた。

◆次年度に向けた課題・展望

(1) スクーリングについて

- ・スクーリングでB グループのような口頭でのコミュニケーションを行う場合、コースの人数比が極端になってしまうことが予想される。しかし、A グループでの人数比率を鑑みれば、学習意欲の高い生徒は多いと言えるだろう。まずは文字でのコミュニケーションから始め、その後口頭でのコミュニケーションにもチャレンジしてみよう、というように、段階を追って生徒のチャレンジ精神や学習意欲を涵養していきたい。
- ・スクーリングにおける時間配分を考える必要がある。特に、振返りの時間は確実に確保したい。生徒間の活動に意識を向けすぎると、他の活動の時間が足りなくなってしまう。これを防ぐためには、教員側で解説するレポートの問題を厳選することや、生徒の活動時間の予測を入念に行う必要がある。令和7年度は、生徒の学習活動におけるインプットとアウトプットのバランスを取っていきたい。

(2) 必修科目でのコース制実施について

令和6年度は上級科目である文学国語Aでの実践であったため、学習意欲が高い生徒が多かったと考えている。一方、必修科目では学校生活に慣れていない新入生が多く、学習そのものに苦手意識を持つ生徒も多数存在するだろう。このような生徒に焦点を合わせ、スマールステップを意識しつつ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実践していくための工夫をしていきたい。

◆課題点と解決に向けた方向性

(1) 課題点

- ・従来型のスクーリングでは画一的な指導を行っていたため、生徒のニーズとのミスマッチが発生しやすい。少ない出席機会の中でミスマッチが発生すると、出席意欲の減退と学習の停滞に繋がる。
- ・学習には大きく「基礎知識の定着」と「深い学び」「協働的な学び」の2段階が想定される。本校では開校以来「基礎知識の定着」を重視した丁寧な指導を心掛けてきた。文科5期の3年間の研究では、今までなかった「深い学び」「協働的な学び」を重視したレポート及びスクーリングの改善に努めた。しかし、「深い学び」「協働的な学び」を重視したが故に、「基礎知識の定着」の比重が相対的に下がり、それを必要とする生徒層の実態に見合わない場面が散見されるようになった。

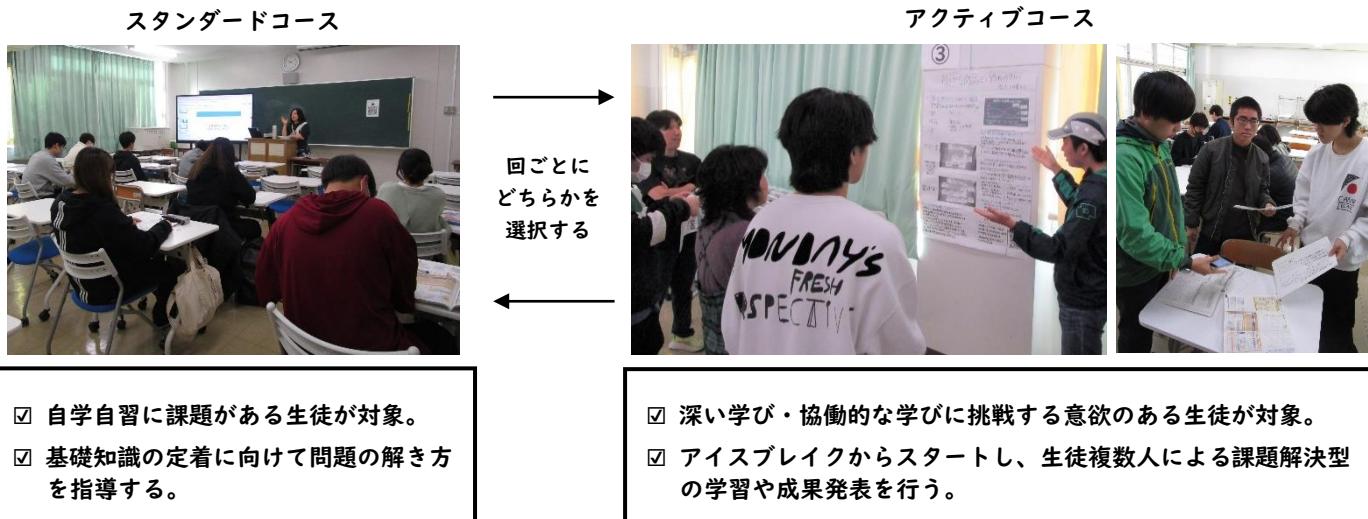
(2) 解決に向けた方向性

- ・複数の学習手段を用意することで、生徒が自分自身の学習状況や興味・関心に応じてスクーリングにおける学習手段を選択できるようにする。
- ・基礎知識を定着させるとともに、それを自ら主体的に学ぶことができるよう支援する。さらに、段階的に「深い学び」や「協働的な学び」に移行できるようなスクーリングのあり方を検討する。

◆今年度の取組

(1) 公共

- ①実践方法 … 教員2名2教室体制。各教室の学習手段・内容を完全に分離して実施する。



②実践の成果

- ・アクティブコースでは自身の関心に応じた調べ学習をはじめ、その成果をポスターセッション形式で発表する活動、学習内容をスタンダードコースの生徒に授業する活動などを行った。
- ・2コースの交流機会を盛んに設けることにより、アクティブコースのアウトプットの場とともに、スタンダードコースの生徒を段階的にアクティブコースへ移行することを促した。
- ・アクティブコースの生徒はスクーリング外の時間も使って自主的に学習や発表の準備をする場面もあった。主体性の向上という点で効果があったと見込まれる。

(2) 歴史総合・世界史探究・倫理・地理総合

①実践方法 … 教員 2 名 2 教室体制。学習段階で教室を分け、自身の段階に応じて教室移動する。

※人的資源への圧迫を考慮し、世界史探究と倫理では上記の取組について、移動を伴わない 1 名 1 教室で実践。

【第 1 段階】自学自習による基礎知識の定着

- 冒頭の一斉指導で本時の学習内容に対する動機付けを行う。
- 自習形式で基礎知識の定着を目指しつつ、進度に遅れのある生徒に個別指導を行う。

本時の内容が完了次第移行
※2 教室体制の場合別教室へ移動

【第 2 段階】深い学び・協働的な学び

- 付箋アプリ Figma を活用し、問い合わせに対する意見を投稿する。
- ICT を活用した双方向的な意見共有や習得知識を応用した発展問題に取組む。

②実践の成果

- ・いずれの科目でも、スクーリングを協働的な学びと深い学びの場にするため、「基礎知識の定着」部分について予習を促した。結果、予習する生徒が回を追うごとに増加した。また、下記授業後アンケートの分析結果にあるように、回を追うごとに「予習」と「深い学び」「協働的な学び」の両方で生徒の意識向上が見られた。
- ・「深い学び」「協働的な学び」については、1 名 1 教室体制でも 2 名 2 教室体制とほぼ同様の成果を得られた。人的資源を考慮すると 1 名 1 教室での運用が理想的と言える。
- ・一方で、学習段階の移行に伴って教室移動を課す 2 教室体制のメリットもある。【第 1 段階】の教室では時間経過とともに知識の定着した生徒が【第 2 段階】の教室へ移動して減少する。それにより、「遅れたくない」という外発的動機から予習が促される場面も見られた。また、【第 1 段階】の教室に残った進度に遅れのある生徒に対して重点的に個別指導を行うこともできる。この点で、2 名体制の恩恵は大きいと言える。

付箋アプリ「Figma」を活用した協働的で深い学び



↑事例の詳細は 2 次元コードを読み込んで画像を参照↑

倫理・地理総合の授業後アンケートの分析（質問「学習成果向上のため、今後どのように取り組みを改善したいか？」）

記述内容の分類	倫理		地理総合	
	実践初回の結果	最新の結果	実践初回の結果	最新の結果
予習を重視	18.5%	20.7% (+2.2%)	15.8%	21.1% (+5.3%)
「深い学び」「協働的な学び」を重視	29.6%	48.3% (+18.7%)	63.2%	73.7% (+10.5%)

◆次年度に向けた課題・展望

(1) 「深い学び」「協働的な学び」へ促すための指導

公共の実践ではスタンダードコースからアクティブラーニングコースへ移動する生徒がおらず、活動生徒が固定されていた。「基礎知識の定着」から「深い学び」「協働的な学び」の段階へ促すための方策を検討したい。

(2) 自宅学習とスクーリングの学びの循環化

- ・歴史総合と倫理を中心に、レポートの予習をもとにスクーリングで発展的な学びを行う反転学習を実践した。今後は、スクーリングでの学びを自宅でのレポート学習で反映できるよう、レポートとスクーリングの繋がりを高め、双方の学習が相乗効果を發揮するような仕組みをつくりたい。
- ・予復習に対する意識づけや学び方そのものの指導を十分に行うことができなかった。レポート・スクーリングの改善を通して、生徒が学校から離れた場所でも主体的に学習に取組めるような仕組みづくりを検討したい。

(3) 生徒の自己理解を促す手立ての検討

生徒が自らの能力や興味・関心を認識できなければ、個別最適な環境を整えても十分に機能しない。そのため、レポートやスクーリングの中で生徒が自分自身の興味関心や学習状況に関するメタ認知の機会を設けることで、正しい自己理解に基づく学びの最適化を促したい。

◆課題と解決に向けた方向性

(1) 課題点

- 同一問題に同一解答である従来型のスクーリング・レポートでは到達度や目的に差がある生徒一人ひとりに対し、それぞれ最適な指導を行うことは難しかった。
- スクーリングに参加する生徒の需要としては「レポートの完成」と「数学のより深い理解・実践」の2つがあげられる。文科5期では、「深い学びの問い合わせ」を用いて「深い理解・実践」を達成しようとしていたが、生徒全員に対して同じ解答となる問題のため、結局「レポートの完成」に比重が乗ってしまう結果となっている。

(2) 解決に向けた方向性

- レポートの内容の一部を、幅を持たせた問い合わせとし、スクーリング内でも「深い理解・実践」につながる問い合わせやプリントを用意することで生徒一人ひとりが興味をもって数学を自ら学ぶ姿勢が持てるような構成を心掛ける。
- 「レポートの完成」についても、「自ら実践して解答を求める」ことができるよう生徒一人ひとりの理解力のハードルの高さを意識しつつ、実践中のつまずきに注意しながらスクーリングを行う。

◆今年度の取組

(1) 数学B・Ⅲ

①実践方法 … 自分の学習状況に応じた振り返りをレポートに組込む。

学習状況に応じた振り返りの問い合わせ

深めな、《7》数学Bのレポート4通目から6通目を通して確率変数の単元を学習してきました。今現在、あなたの学習の達成度を振り返って、みてあてはまるもの以下の3つの中から選んで、それに応じた問題演習を次に一課解きなさい。また、レポート4通目から6通目を通して学習した振り返り、または感想を書いてください。

※どの達成度を選んでも評価基準通りに評価します。

【思考・判断・表現】

Ⓐ：確率変数について、基本のところからよくわからない。

Ⓑ：問題演習：特によくわからないところについて、教科書の例題もしくはスクーリングで解いた問題。

Ⓒ：レポートについて合格はしたが、間違えてしまった部分がある。

Ⓓ：問題演習：間違えてしまった部分の教科書の練習問題、もしくはスクーリングで解いた問題。

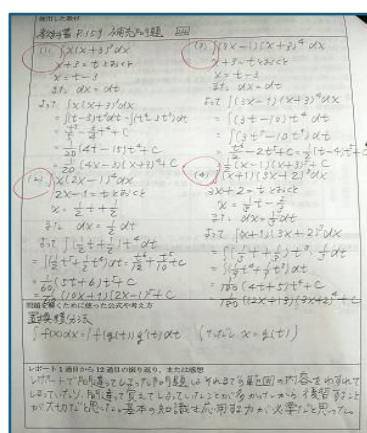
Ⓔ：レポートは問題なく解ける。

Ⓕ：問題演習：教科書の確認問題、もしくは自分で用意した問題集の問題。

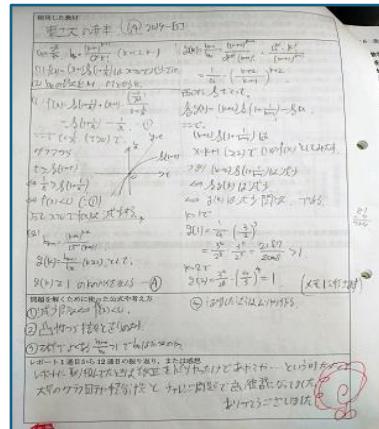
自分で選んだ番号…

目標の達成度	A			B			C		
	問題演習の解答、振り返り、感想に加えて問題演習で使った公式や考え方記述されている。	問題演習の解答ができても振り返り、感想も記述されている。	問題演習の解答ができない。	問題演習の解答ができても振り返り、感想が空白である。	問題演習の解答ができない。	問題演習の解答ができない。	問題演習の解答ができない。	問題演習の解答ができない。	問題演習の解答ができない。

基礎的な問題の振り返り



自ら用意した発展内容の問題での振り返り



☑ スクーリングでは「自分にとってためになる問題を選んでみよう」と声掛け。

☑ 問題の難易度は評価に関係しないということを念押しすることで、それぞれ必要な問い合わせができる。

☑ スクーリング内では解説までいかなかったプリントの問題も自分で調べて解いてくる生徒もいた。

☑ 基礎的な部分を複数解いてくる生徒もあり、スクーリングにおける生徒の理解力のハードルの参考となる部分も大いにあった。

②実践の成果

- 数学はどうしても達成状況に差ができ、統一した問い合わせでは各々での学習パフォーマンスが最大となるレポートを作成できなかった。それぞれ必要な問い合わせ自分で選ぶことにより、自分の学習状況の把握を自然に行うことができた。
- 自分で問題を選ぶことによりレポートを超えての学習活動の継続にもつながり、過去のプリントや、新しい問題を要求してくる生徒もいて、主体的な学習にもつながったと考えられる。

(2) 数学B・II・III

①実践方法 … プリント等による※ストレッチゴールの設定。

※レポートの内容を超えた、発展的な問題用意するなど、生徒それぞれの能力や特性に合わせて柔軟な目標を設定する余地を設けることをストレッチゴールと呼称している。

改善に向けた動機

- ☑ レポート解説のみのスクーリング・プリントの場合、レポートを予習してきた生徒はすぐに用意した問題が終わってしまい、生徒の関心・意欲を引出すことが難しい。
 - ☑ 数的処理能力が非常に高い生徒もあり、その能力をできる限り良い形で引出していきたい。

深い学びを自ら積み重ねるための手ほどき

- ✓ レポート解説に加えて、本時の内容で解答可能な発展的な問題をプリントに組込んだり、授業中に紹介したりする。
 - ✓ 取組みが深い生徒にはさらに発展的な考え方を紹介する。
 - ✓ 自宅でも発展的な学習に取組めるように、Classiでの学習の実践をスクーリングで行う。

②実践の成果

- ・レポートの予習をし、スクーリング内でプリントの発展的内容に取組む生徒が増えた。
 - ・自宅学習で、スクーリングで扱った内容を自ら調べ、その発展内容まで調べ質問してくる生徒が増えた。

発展的内容の組込み例

授業で行った発展的な内容を
自宅学習で深めてきた例

【メモ】※先生の話から黒板に書いてある説明の中で、「大事だな」と思ったことを書きました。

$$I_n = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^n x dx = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos^n x dx$$

(king property より)

$$I_n = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin x \cdot \sin^{n-1} x dx$$

$$= -[\cos x \sin^{n-1} x]_0^{\frac{\pi}{2}} + (n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos^2 x \sin^{n-2} x dx$$

$$= (n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} (1 - \sin^2 x) \sin^{n-2} x dx$$

$$= (n+1) I_{n-2} - (n-1) I_n$$

よって $I_n = \frac{n-1}{n} I_{n-2}$

n が奇数のとき

$$I_n = \frac{n-1}{n} I_{n-2} = \frac{(n-1)(n-3)}{n(n-2)} I_{n-4}$$

$$= \dots = \frac{(n-1)!!}{n!!} I_0 = \frac{(n-1)!!}{n!!}$$

n が偶数のとき

$$I_n = \frac{n-1}{n} I_{n-2} = \frac{(n-1)(n-3)}{n(n-2)} I_{n-4}$$

$$= \dots = \frac{(n-1)!!}{n!!} I_0 = \frac{(n-1)!!}{n!!} \frac{\pi}{2}$$

授業内で Classi を用いた学習実践



◆次年度に向けた課題・展望

(1) 「協働的な学び」をスクーリング内に組込む手だて

令和6年度は発展的内容を必要とする生徒に対しての取組が中心となったが、基礎的な内容を必要とする生徒に対しての取組にはもっと手だてを講じる必要がある。令和7年度以降はオンラインレポートとなり、数学でも考え方の共有が容易になるのでそれをスクーリングに取り込み、教室内全体の理解に繋げたい。

(2) 理解を促進させる手だて

生徒に自らが理解したことを発信する機会を設けることでより理解が深まる。具体的には「解きかたの教え合い」をスクーリング内で設定していきたい。全日制では普段から行われていることだが通信制でのスクーリングでは他者とのかかわりが苦手と感じる特性を持つ生徒が多いため、行うことがためらわれている。レポートをオンライン化することで本取組が構築できるか検討・実践していきたい。

◆課題と解決に向けた方向性

(1) 課題点

- ・生徒によって計算やデータ分析を行う力にかなりの差があるため、従来の一斉型の授業や探究的な活動を実施すると理解に差が生じる。
- ・年間を通じたカリキュラムの中で実験、実習の機会を十分に設定できていない。また、現在実施している実験も生徒個人で実施可能なものが中心で、協働実験を行えていない。
- ・どの生徒が出席するか把握が難しいため、実験に向けた事前指導、準備が難しい。

(2) 解決に向けた方向性

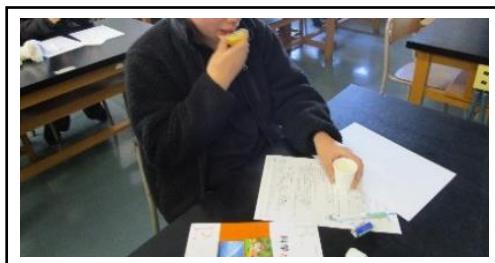
- ・生徒一人ひとりの学習到達度や興味・関心に合わせ、課題を選択できるようにする。
- ・実験の機会を単純な経験とするのではなく、「個別最適な学び」や「協働的な学び」に繋ぐ手段を検討する。
- ・生徒の実態に合わせスクーリングの中でオンライン、対面等の方法でコミュニケーションの機会を設ける。

◆令和6年度の取り組み

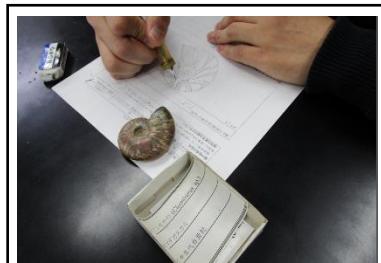
(1) 探究学習の手段の選択 <科学と人間生活、生物基礎、生物>

①実践方法

- ・理科のレポートには個人の関心に基づいた探究課題がある。「個別最適な学び」の実践として、この探究課題において、実験に出席した時の報告書か、個人の探究活動を行うか選択させた。令和6年度は科学と人間生活で「ミラクルフルーツの体験」、生物基礎で「化石のスケッチ」、生物で「ブタの眼の解剖」を実施した。



ミラクルフルーツの体験の様子



化石をスケッチしている様子



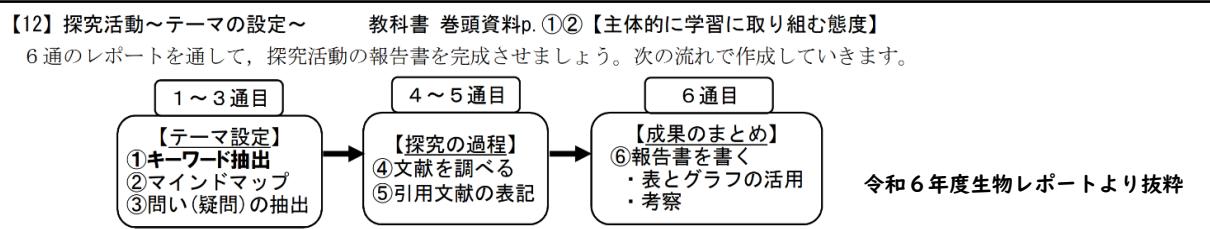
ブタの眼の解剖の様子

- ・今後実施を検討している理科におけるコース制では、実験を伴う活動と通常の学習活動を分けることが想定される。事実、過去に実施された生物のブタの眼の解剖においては抵抗のある生徒は別室対応を行っていた。そこで前期末に生物基礎（多展開の時間のみ）にて顕微鏡によるオオカナダモの観察をするか、レポートの完成を目指すかを選択させる時間を設け、生徒に選択させ傾向を調べた。

②実践の成果

- ・個人の探究活動と実験の報告書の選択では、実験に出席した生徒の多くは実験の報告書を選択していた。
- ・個人の探究活動は、科目を学ぶ過程で疑問に思ったことをテーマとして探究することが多かったが、日常生活の中から設定されたテーマも見受けられた。

- 理科の上位科目には、個人の探究活動を通年で実施しているものがあり、段階的に探究活動を行うことができる。これによってレポートの添削を通じ、継続的に生徒の学習段階に応じた指導を行うことができた。レポートには次のように学習方法が記載されている。



- 生物基礎では、顕微鏡によるオオカナダモの観察に2講座合わせて約6割が出席した。

(2) 協働的な学び <地学基礎、くらしと環境>

①実践方法

令和6年度は「協働的な学び」を意識し、与えられたテーマに対する議論（くらしと環境）、Padletなどを用いたWeb上の意見交換（地学基礎）を行った。

②実践の成果

- くらしと環境における探究活動は事前に協働学習か、個人学習か選択させた。当日は協働を考えていた生徒が出席していなかったこともあり、2講座合わせて2人組1ペアのみ協働活動を行った。最低出席回数を満たしており、出席する必要性を感じなかったことが一因と考えられる。
- Web上の方が自身の考えを主張したり、他者へ意見したりする積極性は高いように感じられた。
- 「協働的な学び」を意識した実践は課題が多く、様々な実践例を教科で共有し、より意味のあるものにしていく必要がある。



くらしと環境における探究活動の様子



地学基礎におけるWeb上の意見交換

◆次年度に向けた課題・展望

(1) 「個別最適な学び」を探究的な学習の手段としていく方法

探究か、実験か選択することで、簡単な課題を選択する生徒が多くなることが懸念される。これは生徒の挑戦を阻害し、「個別最適な学び」とならない恐れがある。どちらの選択でも「探究的で深い学び」に繋がることが望ましい。実験の内容、目的が「探究的で深い学び」に繋がり、生徒がより成長できる選択となるよう引き続き教科として検討していく。

(2) 協働的な学び

- 対面でのコミュニケーションが少ない通信制において、貴重な機会であるスクーリングで協働学習を継続的に実施することは重要である。他教科の実践例を参考にしながら、教科内で実践例を積重ねていきたい。
- ICTの活用は地学基礎のように手応えのある事例もあった。対面の協働学習ができれば一番良いのかもしれないが、本校の生徒の特性を考えると選択肢は多い方がよい。こちらも引き続き教科で検討を重ねたい。

◆課題点と解決に向けた方向性

(1) 課題点

- ・文科5期の3年間の研究で、ICTを活用した意見共有や他者と協働で学習する機会を設定するなどのスクーリング改善を図ってきたが、各回で完結してしまう内容であったため、継続的な学習活動につながっていないと感じる。
- ・多様な背景を持つ生徒が多い本校において、生徒一人ひとりが抱える健康課題も多岐にわたるが、これまでのレポートでは、「深める問題」(文科5期の研究)として設定している課題が一つの事例に限定される内容であったため、自分のこととして落とし込めず、教科書通りの解答にとどまる生徒が多数見受けられた。
- ・他者との意見共有等の協働的な学習に苦手意識を持つ生徒も多く、スクーリングでは、活動内容や方法のバランスを考える必要がある。

(2) 解決に向けた方向性

- ・継続的な学習活動につなげるために、①継続性のある学習活動の設定、②学習の成果を確認できる機会の設定、③体験活動や「協働的な学び」など生徒の興味関心を高めるような学習内容の工夫を図りたい。
- ・多様な背景を持つ生徒が、①自分の生活習慣や健康課題をもとに学びを深められるような課題の設定(学習内容の工夫)や、②安心して学習活動に参加でき、自己にあった方法(活動形態の工夫)を選択できるような「個別最適な学び」を検討していく。



◆令和6年度の取り組み

(1) ICTを活用した意見共有や体験活動を通した「協働的な学び」

①実践方法

- ・まずはICT(スプレッドシートやPadlet)を活用した間接的な意見共有。
- ・ワークシートでの学習や体験活動などを少しずつ取り入れ、対面での「協働的な学び」を実施。
- ・年度末には、3週にわたって実施した調べ学習を、4週目で発表(グループ発表・全体発表)を実施。

②実践の成果

スクーリングの振り返りの生徒のアンケートから、ICTでの意見共有や対面での「協働的な学び」に対して学習の充実度の高さがうかがえる肯定的な感想が複数見られた。



【活動・共有の抜粋】

(2) 学習内容や活動形態の選択制による「個別最適な学び」

①実践方法

- ・レポートでは、学習内容をより身近な健康課題として考えられるように、題材の選択や自分で設定できるようにした。
- ・スクーリングでは、教室内で学習活動の形態を選べるように、あらかじめ、机の配置を個人・ペア・グループに設定し、自分の活動したい方法を選んで着席できるようにした。体験学習で個人ワークを希望した生徒は、「観察係」としてペアでの活動の様子を観察して、それを全体の意見共有に入力させるなどで参加を促した。

②実践の成果

- ・学習内容の選択によって、健康課題を自身の日常生活に当てはめて考えることができ、自己との対話を通して一人ひとりの視点で学びを深めることができている。
- ・活動形態の選択制により、他者とのコミュニケーションが苦手な生徒にとっても参加しやすい場になっていたと感じる。



【生徒の解答】 【↑体験学習の様子→】



◆令和7年度に向けた課題・展望

(1) 継続的な学習につながる学習活動の工夫と「協働的な学び」の工夫

令和6年度に実施した調べ学習と発表の時間を、年度を通して実施できるような構成を検討する。その際、他者との意見共有・意見交換を踏まえてさらに深める方法や、2人以上で学習を進めるなどの「協働的な学び」の方法も検討したい。



(2) 「個別最適な学び」に向けた学習課題の選択制

【R7年度レポート】

個別の背景や健康課題、興味関心によって考えを深められるように、「深める問題」を4問設定し、その中から2問以上選択することで、自分事としてより関心をもって学習に取組めるようなレポート改善を行いたい。

◆課題点と解決に向けた方向性

(1) 課題点

体育の実技では、スキル練習など2人以上で活動することが多いという科目の特性上、「協働的な学び」は必然的に行われるが、教員一人に対して20~30名の生徒の安全面を確保することを考えると、スクーリング内で「個別最適な学び」を設定することは難しい。

(2) 解決に向けた方向性

- ・学習に取組む意識や目標、知識の活用方法を一人ひとりが選択・設定できるようなレポートの作成を行う。
- ・レポートで学んだことをスクーリングで活用する方法や構成の検討。
- ・スクーリングで実践したことを、スクーリング内で振返る時間の設定や、レポートにまとめるための課題の設定を工夫する。

◆今年度の取り組み

(1) 学習内容の選択制による「個別最適な学び」

①実践方法

指定された種目において、「どの技術を上達させたいか」という問い合わせをレポートに設定し、個人の課題や考え方によって上達させたい技術を選択して記述できるようにした。

②実践の成果

自分自身の能力やこれまでの経験を踏まえて考えることができるために、解答の一つ一つが生徒の価値観や個性が反映されている。

5 あなたがバレーボールで身につけた方が良いと思う技術は何ですか。以下のの中から選び、その理由を書きなさい。(P.188~203)【監】

私が上達したい技術は・・・

※どれか一つに○をつける
パス・レシーブ・サーブ・スパイク

その理由は・・・

です。

だと思うからです。

【体育Ⅲ レポート】



【Padlet例】

(2) ICTを活用した意見共有による「個別最適な学び」「協働的な学び」

①実践方法

- ・体育Ⅱの器械運動（マット）でPadletを使用し、技のポイントや改善点などの意見共有を実施。
- ・学習状況によって生徒自身が課題を選択したり、活動時間を工夫。

②実践の成果

- ・他者の意見を参考に、技の習得に向けて工夫して取組む生徒が増えた。（協働的な学び）
- ・目標の達成に向けて、Padletを参考にしながら自己のペースで活動を進めることができた。（個別最適な学び）
- ・より活発で有効な意見共有を促すためには、ICTを活用する時間を明確に設定する必要があると感じた。



【実践→レポート】 【レポート→実践】

◆次年度に向けた課題・展望

(1) レポートとスクーリングの関連性の向上

レポート学習で獲得した知識・技能や思考力・判断力・表現力等を実際の運動場面（スクーリングや日常生活）で生かし、実践の成果をレポートにまとめる項目を設定した。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けて、レポートとスクーリングの関連性を高めていきたい。令和7年度は、生徒の取組状況を観察・分析する。

(2) 「協働的な学び」の工夫

体育は「協働的な学び」が必然の科目であるため、他者と関わるハードルを下げる工夫ができれば他教科に対してもよい影響が出るのではないかと考えた。そこで、ウォーミングアップとアイスブレイキングを組合せた活動をつくり、年間を通して実施していきたい。

(3) 実技における「個別最適な学び」の実践

生徒一人ひとりの学習状況や運動経験等に応じて、課題や学習方法を選択できる形式を模索する。また、生涯を通じて運動にかかる習慣を身につけさせるという目標に向けて、学校外での運動による経験や学びを報告課題として設定できないか検討していきたい。

◆課題点と解決に向けた方向性

(1) 課題点

- ・芸術科の教科特性として、生徒一人ひとりが内発的な動機に基づいて多様な観点から芸術に対して主体的に関わりを持つことが挙げられる。そのためこの興味・関心に応じた指導は行いやすい。しかし、その取組をより効果的なものにするためのスクーリングで取扱う参考作品や教材準備等への工夫が課題となっている。
- ・根拠をもって自らや他者の表現を批評する主体的で協働的な学習の機会を、スクーリングやレポートの中でどのように実現するか。

(2) 解決に向けた方向性

- ・スクーリング内でのテーマや課題の選択肢を複数用意し、生徒に選択の余地を与える。
- ・言葉で表現し他者と伝え合い、論じ合うことをとおして主体的で協働的な学習の機会に取組む機会をできる限り設ける。

◆令和6年度の取組

(1) 美術科 … 「個別最適な学び」のための生徒一人ひとりのテーマの追求による写真集制作〈美術Ⅱ〉

①実践方法

生徒の自由な発想や様々なアイデアなどを引出す意図で参考作品を複数用意した。机間指導の際には使用する素材やアイデアによってアドバイスの内容を変え、完成作品のイメージを生徒と共有しながら制作を進めた。



写真集の台紙制作の様子



使用する写真を選択する様子



台紙の形状を工夫した生徒作品

②実践の成果

参考作品を見て「外の風景だけでなく室内や好きな食べ物、趣味で制作した日用品を撮影した写真があり、テーマを決める時の参考になった」、「あえてモノクロにしている作品を見て色味を変えようと考えた」などの発言があり、発想に繋がるきっかけになった。その結果、ページ数の多い作品や台紙の形状を工夫した作品、写真の色味の効果を研究した作品など、個性的な作品の提出があった。自分の写真フォルダを振り返る事で、撮影する物の傾向を理解し、己の表現方法や方向性を広げることができたという感想が多く見られた。

(2) 工芸科 … 「個別最適な学び」のための課題選択制による平織コースター制作〈工芸Ⅱ〉

①実践方法

1枚目は全員が基本となる四角形を制作させた上で、2枚目は同じ四角形か、その発展形の丸形を制作するかを生徒が選ぶことができるようとした。また、色見本を参考に配色のスケッチをさせ、完成時の色合いをイメージできるようにしてから作業を行った。



平織コースター 生徒作品

②実践の成果

- ・2枚目に引続き角型を選んだ生徒は、1枚目の反省を活かし縦糸を織るときに経糸を引っ張りすぎないようにするなどして形の歪みを防ぐ場面が多く見られた。1枚目で得た知識を2枚目に繋げてより形や色のバランスの良い作品を創作することができた。こうした成功体験は、学習意欲を向上させることにつながったと考えられる。
- ・2枚目に丸形に挑戦した生徒は、難易度の上がる異なる制作方法を身につけると同時に、戸惑いながらも同じ平織という織り方を通して両者に共通している点を見つけ、織に対する理解を深めることができた。またそれらを通して日常生活の中で使っている布製品や織物の作りに着目できた生徒も多く、深い学びが得られたと考えられる。



左：1枚目 右：2枚目

※平織コースターを完成させた感想	
糸の色が「ランボル」の板で、しかもナオモ難しくなくて作れる	めると簡単
ここに織りました！四角の方は、糸の量が少ないので、糸が少なくていいです。	難しくない

2枚目に丸形を制作した生徒の感想

(3) 音楽科 … 「協働的な学び」を行うための箏による器楽表現〈音楽Ⅰ〉

①実践方法

初めて楽器を手にする生徒でも、既に箏の演奏に長けた生徒でも満足できるよう、教員は生徒個々の能力に合わせた楽器演奏や音楽表現が出来る楽譜を用意したり、編曲をしたりした。その上で、写真（例1）のように二人一組になり、お互いに技術的な問題を指摘し合うことで、生徒自身で技能を高める学びとした。また、教員は個々に指導を行い（例2）、指導を受けた生徒のみならず、ペアの生徒にも、その指導の意味が伝わるようにすることとすることで両生徒の技術向上と応用を図った。最後には必ず、合奏を行った。

②実践の成果

生徒同士で気づいたことを言葉や動作で指摘しあったことで、指摘された生徒はより注意深く演奏に取組むことができた。こういった活動は、具体的に技術的欠点を直ぐに克服することにつながり、演奏技術の向上が早まるこにも結び付いた。その結果、初めて箏に触れた生徒でも、ほとんどの生徒がスクーリング内に課題の曲を最後まで箏譜の指示に従って弾けるようになった。

合奏では、全員で1曲を仕上げたという達成感が得られたと同時に、喜びを感じることもできた。また、他者の演奏を聞くことで、一人で弾いているときには気づかなかった箏のよさや音色の美しさなどを見いだすことができた。他者と協力しながら「奏てる」という音楽表現を行ったことで、より深い学びとなった。



ペアで箏の演奏（例1）



教員からの指摘をペアで理解（例2）

(4) 書道科…「協働的な学び」を行うための作品発表による鑑賞〈書道Ⅰ、書道Ⅱ、書道Ⅲ〉

①実践方法

書を構成する要素の特性から他者の作品を鑑賞し、視点を広げることで「「良い作品」とはどのような作品か?」という問い合わせに対する自らの考えを持つことを目標とした。その為に、自分の作品に対する他者からのコメントを参考に「問い合わせに対する自分の考え方を持つこと」について知ることを目的に制作作品による鑑賞を行った。スクーリングでは、黒板に紙面構成や字形の異なる複数の自身や他者の作品を並べて貼っていき、相互鑑賞を行った。また、文化祭ではスクーリングでの制作物に裏打ちをし、ラシャ紙で枠をつけて展示をした。その際に「いいねシール」と称し、自分が良いと思った作品に対して丸シールを貼ってもらった。好みによってシール数に偏りは出るが、貼られていない作品はいつもなかった。また、作者に届く意見共有の手段としてコメントカードを用意したところ、生徒に限らず鑑賞に訪れた多くの人からメッセージが寄せられた。

②実践の成果

鑑賞後の制作では、作品を多方面から見ることができるようになり、自身の制作の中で紙面構成や字形を意識し、淡墨を使用、筆以外のもので文字を書く等、用具用材の変化にも着目し、自由な発想と技能の向上へと繋げることができた。また、スクーリングに継続して参加し、制作活動に積極的に取組む生徒が増加した（2次元コード参照）。

文化祭では、スクーリングで共に学んでいる生徒の作品をお互いに時間かけてゆっくりと鑑賞している姿が多く見られた。保護者や近隣の方々など普段交流のない人の目にも触れるという刺激や、メッセージをもらうことで、今までにない新しい視点を得ることができた。



漢字仮名交じりの書
鑑賞における制作

◆令和7年度に向けた課題・展望

(1) 「個別最適な学び」

生徒が自分の理解度に応じて完成作品・発表のイメージを幅広く持てるようにするために、制作や演奏の際の参考作品や作品観賞での資料を題材・テーマに偏りなく増やし、取扱う作品を吟味する。

(2) 「協働的な学び」

演奏や制作活動にかける時間を充分に確保することが難しいが、スクーリングの内容を精選し、生徒同士が協力したり意見を述べ合ったりすることをとおして、「奏てる・描く・作る・書く」活動の機会の充実を図る。

◆課題と解決に向けた方向性

(1) 課題点

- ①文科5期の3年間の研究を通して「主体的・対話的で深い学び」を目指したスクーリング改善に取組、ICTを活用して生徒同士の間接的な会話をを行うスクーリングが定着した。しかし、英語で直接伝えあう力を育成することも重要であると考えているものの、十分に実施されているとは言えない状況である。
- ②本校には多様な背景を抱える生徒（例えば、直接的な会話が苦手な生徒等）が在籍しているため、画一的な指導法が適切ではない場面がある。

(2) 解決に向けた方向性

- ①「深い学び」の実現のために、生徒同士の直接的な会話による「協働的な学び」を取り入れたスクーリングを実践したい。
- ②「協働的な学び」に取組む際に、生徒自身が学習手段を選択できるような「個別最適な学び」を取り入れたスクーリングを実践したい。

◆令和6年度の取組

(1) 「協働的な学び」を行うための「個別最適な学び」を取り入れたスクーリングの実践 <英語コミュニケーションI>

①実践方法

英語コミュニケーションIにおいて、担当教員4名で2名ずつの2ペアに別れ、以下の表のように実施方法や名称を検討した。生徒は自分が出席する火曜日か木曜日の講座において、どちらのコースにするかスクーリング開始前に自由に選択できるようにした。

	コース制の実施頻度	間接的な会話をを行うコース	直接的な会話をを行うコース
火曜	後期から毎週	ICT型コース	対面型コース
木曜	後期から4週間に1回*	スタンダードコース	アクティブコース

*生徒自身の考えを書く【深める問題】を扱う週のみ。

②実践の成果

ICT型では、生徒一人ひとりがChromebookを使用し、様々なアプリを活用しながらスクーリングを実施した。例えば、MetaLifeを利用してメタバース空間で生徒同士がチャットで英会話をする活動などを行った。直接的な会話が苦手な生徒でも、チャットで即時に行われる英語での会話に積極的に挑戦しようとしていた。Padletでの間接的な会話から対面での直接的な会話への移行段階の活動として非常に意味のある実践だったのではないだろうか。出席人数は毎回約20名で、生徒に実施したアンケートでは「実際に顔を合わせてではないので安心してペアワークを行うことができた。」「また挑戦したい。」という感想があった。

対面型では、ペアワークを取り入れ、生徒同士で学習内容を確認したり、黒板に板書をしたり、お互いに教え合う姿も見受けられた。出席人数は毎回約5名と少なかったが、和やかな雰囲気の中で教員と生徒で会話をしながらスクーリングを実施した。「最初は与えられた会話文しか話せなかつたが、次第に自然な会話ができるようになった。」という感想を述べる生徒もいた。

スタンダードコースでは、文科5期の3年間の研究を通して定着したPadletを活用して生徒同士の意見共有を行った。直接的な会話が苦手な生徒でも、匿名での間接的な会話に積極的に取り組んでいる様子が見受けられた。出席人数は毎回約15名で、生徒に実施したアンケートでは「コミュニケーションが取れて楽しかった。」「他の人の考えに興味を持った。」という意見があった。

アクティブラーニングコースでは、ペアワークによる英語での会話や意見の共有を行った。ペアワークのための導入を丁寧に行い、英語で会話することの楽しさや達成感を感じられるようなスクーリングを目指した。出席人数は毎回約4名と少なかったが、英語での直接的な会話に挑戦したいと思う生徒にとって良い機会となったのではないだろうか。生徒に実施したアンケートでは「英語で会話をする楽しさを知ることができた。外国人の人と話してみたい。」「他の人の意見を英語で理解することができた。」という意見があった。

各レポートの終了時に実施したアンケートにおいて、スクーリングの達成感を質問したところ、「達成感がある」と回答した割合は以下の表のように49%（前期）から55%（後期）に上がった。後期から実施したコース制による成果であるとは言い切れないが、学習手段を生徒自身が選択できるようにしたことは生徒にとってある程度良い影響があったのではないだろうか。

【スクーリングに対する達成感のアンケート結果】

	ある	まあまあある	あまりない	ない
前期の平均	49%	40%	10%	1%
後期の平均	55%	36%	7%	2%

【各スクーリングの様子】



(2) 「個別最適な学び」を取り入れたスクーリングの実践 <英語コミュニケーションⅠ>

①実践方法

ICT型のスクーリングでは、生徒一人ひとりがChromebookでChatGPTを利用して文法の練習に取組んだり、ChatGPTと会話練習をしたりする活動が行われた。

文法練習では、動詞の不規則変化や進行形の練習を行った。ChatGPTが出題した動詞の正しい不規則変化が答えられれば、次の動詞が出題される。間違えた場合は、ChatGPTが答えを修正したうえで次の動詞が出題されるように担当教員がプロンプトを組んだ。会話練習では、基本的な単語や文法を使うようにプロンプトが組まれており、既習文法を用いた会話練習を行った。

②実践の成果

ChatGPTを利用することで、生徒一人ひとりの習熟度やペースで学習に取組む様子が見られた。文法練習では、学習が進んでいる生徒は答えの入力が速く次々と問題が出題されていたが、教科書で答えを確認してから落ち着いて答えを入力する生徒もいた。会話練習では、直接的な会話が苦手な生徒でも、文字入力による間接的な会話に挑戦しようとする姿もあった。生徒に実施したアンケートでは「相手がAIだったので、気軽に英語を使うとする気持ちになった。」「自分のレベルに合わせて英語を使えた。」という意見があった。

発展問題のプリントの用意や個別対応など今までの取組に加えて、このような先進的な取組を実践できたことは、今後の「個別最適な学び」の新たな方向性を示せたのではないかと感じる。

◆令和7年度に向けた課題・展望

(1) スクーリングについて

「協働的な学び」に取組む際に生徒が学習手段を選択できるようにコース制を実施することはできたが、各コースに出席する生徒が固定化されてしまったことや、直接的な会話をするコースを選択した生徒が少なかったことが課題として残った。コース制の実践方法の再検討や、各コースを知る機会を作るなどの工夫が必要である。

ICT型のスクーリングでのChatGPTやMetaLifeを活用した取組は非常に先進的であったが、操作が難しく実践できる教員が少ないことが課題である。教員間で協力して実践できる環境を構築していきたい。

(2) レポートについて

「協働的な学び」に取組む機会がスクーリングに限定されているので、全生徒が取組むレポートにおいても「協働的な学び」の機会を設定できるように工夫したい。

◆課題点と解決に向けた方向性

(1) 課題点

①生徒一人ひとりの生活体験の差が大きく、生活に必要な知識と技能にも大きな差がある。

特に入学年次に受講することを勧めている「家庭基礎」「家庭総合」のレポートに「初めて洗濯機を回した」と書く生徒が毎年現れる。また自立度チェックを行うと自己評価と家事参加度合は合致せず、「(自分は家事が)まあまあできる」と評価する生徒が多い。一方で生活課題への意識は低く、生活改善につながる目標を適切に設定できないため「日常生活をこなす」ことは意識しても「よりよく生きるために改善」に目を向けることができない。家族との協力が困難な生徒も多く、家族と同居しているからといって生活課題の解決に家族が協力的とも限らないため、ホームプロジェクト（自分の家庭や地域の諸問題に対する課題研究）が単なる家事の実践報告で終わる生徒もいる。また、全体によりよく生きることや生活を改善することは経済的余裕がなければできないという心理的防御が働いている生徒も多いよう感じる。

②他者への関心が少なく、「協働的な学び」に向けた準備が必要である。生徒の多くは小学校または中学校で不登校の経験を持ち、他者との関わりに不安を持つ者が多い。

(2) 解決に向けた方向性

①「個別最適な学び」の課題設定として、生活課題を自ら発見し取組めるよう、生徒が自分自身の能力や興味・関心に応じて学習課題を選択できるようにする。学習に必要な基礎知識の部分は教科書を用いて自学自習できるように、学習の方法についてレポート1通目のスクーリングでは特に丁寧に伝えるようにする。個別の課題に取組むために必要な「周囲の大人や家族の協力を得ること」や「粘り強く取組むこと」については、これまでに同じ科目を受講した生徒の学習活動を紹介して、自分の学習活動につなげて考えさせることで家庭学習への意欲と心理的負担を軽減させるように試みる。

②短時間の演習や工作、作品の掲示や匿名での感想共有など段階的に「協働的な学び」に向けた準備を行う。また、作品の集合（生徒の作品を集め、掲示する）による共同体感覚の醸成を試みる。

◆令和6年度の取組

(1) 「個別最適な学び」の課題設定…<家庭基礎><家庭総合>

①実践方法

一人ひとりの生活課題に応じた課題設定として、レポート1通目で将来設計（人生を見通す）、レポート2通目ではホームプロジェクトとして家事参加を行わせた。また、衣生活分野では自分の着用している衣料品の品質表示から日常の手入れを確認させたり、食生活分野のスクーリングでは家庭での調理実習に向けて計量の実習を行ったりした。

②実践の成果

入学年次のため、将来の見通しが非現実的で、レポート1通目「将来設計」では、「貯金100万円」「大学に入る」という回答があるのは例年通りであった。例年のことながら少数ではあるが「卒業までの目標貯金額1000万円」と書く生徒もいた。レポート2通目では、過去の生徒が取組やすかったことから、家庭生活における家事参加を足掛かりにホームプロジェクトの課題を設定させたが、日常的な家事参加がない生徒が多いことも例年通りであった。単元の学習が進み、衣服の手入れや調理実習など各自で取組む課題や、一人ひとりの生活の振り返りへの添削を通す中で、家事参加の向上につながる回答を得ることができた。また、他教科も含めてレポートやスクーリングなど学習に力を入れたという回答も多く、自分に合った学び方を身につけることができたことを読み取ることができた。

(2) 他者への関心、「協働的な学び」に向けた準備…<保育基礎><生活と福祉><くらしとデザイン>

①実践方法

スクーリング開始時間に短時間の演習に取り組ませた。「保育基礎」ではレポート4通目に課題として設定している「造形」(手先の器用さを養う)につなげるように折り紙工作を行った。製作した作品はスクーリング教室の廊下に掲示し、毎週少しづつ増やしていった。「生活と福祉」では毎時間のスクーリング開始時に手話講座を取り入れた。神奈川県手話言語条例に則り神奈川県手話推進計画が策定され、神奈川県教育委員会は平成28年度から毎年5月を「手話月間」としている。ちょうどスクーリング開始時期と重なるため毎週少しづつ手話表現を増やしていく。

②実践の成果

作品の継続的な掲示により出席の積重ねを視覚的に実感することができ、さらには作品を集めて掲示したことにより受講者同士が共同感覚をもつことができた。自分の作品を見る生徒、他者の作品を見る生徒の姿があり、講座は違っても同じ科目を学ぶ仲間がいることを認識する効果があった。「保育基礎」では、他者の折り紙作品を見せて例年よりもレポートへの取組の意欲が高まる成果があった。「生活と福祉」では、手話表現の量がある程度増えたところで生徒一人ひとりに、自分が伝えたい手話表現を選ぶよう促したところ、これまでに学んだもの以外の単語を自分から探し出し、他者に発信しようとする積極的な生徒も見られた。



保育基礎受講生徒の報告課題の作品



廊下の掲示物 左：製作途中 右：完成品

◆令和7年度に向けた課題・展望

(1) 「個別最適な学び」の課題設定<家庭基礎><家庭総合>（主に必履修科目での取組）

段階的に「深い学び」「協働的な学び」に移行できるようなレポートの設定とスクーリングのあり方を検討する。レポートでは、課題の連続性や家庭生活との関連性を大切にしながら、生徒一人ひとりの生活力に合った個別の課題発見ができるようになることを目指していく。特にホームプロジェクトでは各自の課題に応じて課題に取組むことができるよう、スクーリングや学習コンテンツで個々の課題設定のしかたや課題の取組み方について解説とともに、安易な課題設定にならないよう丁寧に説明する必要があると感じた。ホームプロジェクト全国大会の優秀作品や家庭クラブの発表を提示し、家庭や地域社会及び社会における生活の問題は身近にあることを認識させ、協力・協働は、費用をかけなくてもできる実践であることを気付かせるようにする。家事等の生活体験の少ない生徒に対するスマールステップや学び直しを認める一方で、生徒が設定した課題が適しているかを確認できるよう生徒一人ひとりの背景を理解するためにデータベースの活用や担任との連携を密に行っていく。

(2) 他者への関心、「協働的な学び」に向けた準備<保育基礎><生活と福祉><くらしとデザイン>

他者への関心や「協働的な学び」の導入として、他者との関わりを段階的に増やしていくようにする。子どもの遊びの発達段階にならって始めは並行活動を行い、場の共有や掲示物の合同製作をとおして共同体感覚の醸成を目指し、令和7年度も引き続き今年度の生徒作品や生徒の回答を参考例として提示する。スクーリングの環境に慣れた頃に連合遊びを取り入れて対人交流に移行していくようにし、保育を目指す生徒や高齢者福祉を目指す生徒にはレクリエーションの模擬体験につながるような活動も入れながら自己探求につなげていくようにしたい。

◆課題点と解決に向けた方向性

(1) 課題点

学習到達度の差が大きい情報科としては難易度設定の観点とスクーリング開催回数の観点から、「情報Ⅰ」では教科書の内容を厳選したうえで「情報Ⅰ」に求められている要素のみスクーリングで取り扱うこととしてきた。その結果、小・中学校のコンピュータ操作経験が不足している生徒は実習などの実践的・体験的な活動が不足していることが判明した。

(2) 解決に向けた方向性

学校設定科目の「くらしと情報」で実践的・体験的な活動を重視した課題を取り扱うこととしている。「情報Ⅰ」を履修した生徒を対象とした「くらしと情報」では、アプリケーションを活用した情報表現に触れ、作品の相互鑑賞をすることで「協働的な学び」に結びつける狙いである。しかし、「情報Ⅰ」の実習課題の取組状況を観察する中で、「くらしと情報」で取扱っている活動を早期に体験させる必要がある。

◆令和6年度の取組

(1) 情報Ⅰ

①実践内容

実習内容をアプリケーションソフトの使い方中心から、教科情報の目標に準拠した「深い学び」を促す実践的な内容が中心になるよう見直しを行った。「協働的な学び」として、情報収集におけるテーマ設定の段階で、ブレーンストーミングを行った(図1参照)。Figmaを使用し、スクーリングの時間割の枠を超えて多くの意見に触れてからレポート課題に取組ませた。

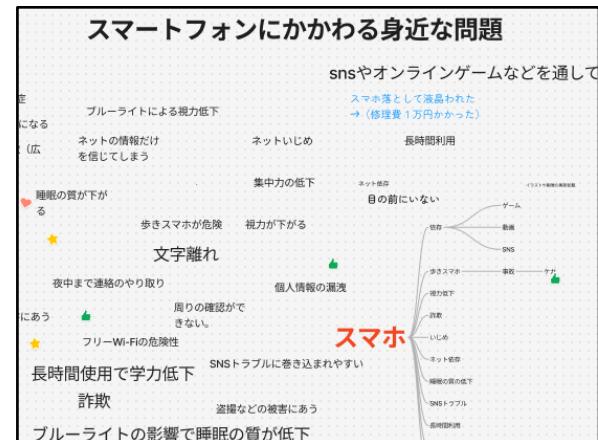


図1 情報Ⅰのブレーンストーミング(一部抜粋)

②実践の成果

問題提起をしてから調査・報告を行うレポート課題について、Figmaを活用して多くの生徒のアイデアに触れることで、独力でアイデアを出しにくい生徒も、自分自身が取り上げたいテーマを設定してレポート課題を取組むことができた。また、ICTの活用により発言が苦手な生徒も意見を述べることができた。

(2) くらしと情報

①実践内容

コンピュータ操作経験(アプリケーション操作体験)を提供し、「情報Ⅰ」で深く取扱いできない実習課題を中心に課題設定した(ポスター作成、スライド作成(図2参照)、アンケート作成、表計算ソフトの関数。)

「協働的な学び」として、任意で生徒の作品の課題を教室に提示し、自分の作品を発信するとともに、他者の作品から手法や自分でも取組んでみたいイメージづくりのきっかけを作った。



図2 スライド作品の作品例(表紙を除く)

②実施成果

レイアウト・コンセプト作成の大切さと、情報発信する際の意識しておきたい配慮事項を考えることができた。一部の生徒ではあるが、課題を通して学んだことを部活や委員会活動に活用し、自らさらに学習して理解を深めていくことができた。

但し、令和7年度より専門教科情報の「コンテンツの制作と発信」を設置することも鑑み、令和7年度から「くらしと情報」は1年次相当に「パソコン入門」に置き換えることとした。「くらしと情報」のノウハウを継承するとともに、図3のような入門としての内容を加えて「パソコン入門」の科目設置に繋いだ。



図3 パソコン入門の1通目資料イメージ

◆次年度に向けた課題・展望

(1) 「個別最適な学び」の提示

令和6年度までは「情報Ⅰ」の後に「くらしと情報」と「情報Ⅱ」で深い学びに繋げていた。令和7年度からは1年次相当に「パソコン入門」、2年次相当に「情報Ⅰ」、3年次相当に「情報Ⅱ」と「コンテンツの制作と発信」を学習することができる。生徒自身の課題意識・学習目標に応じて、個別最適な学習機会の提供を進める。これにより、次の表のイメージのように生徒自身が取り組みたいと感じている情報系に関する課題に応じて、主体的に科目を選び、学びを深めていくことを期待できる。

1年次相当	2年次相当	3年次相当	想定される生徒のイメージ
パソコン入門	情報Ⅰ	履修なし	コンピュータ操作に課題を感じており、情報系の基礎から確認したい生徒
パソコン入門	情報Ⅰ	コンテンツと制作	情報系に興味があり、情報発信について基礎から発展まで広く学びたい生徒
パソコン入門	情報Ⅰ	情報Ⅱ	情報系に興味があり、情報処理について基礎から発展まで深く学びたい生徒
履修なし	情報Ⅰ	履修なし	コンピュータ操作に課題を感じておらず、最低限の内容を学習したい生徒
履修なし	情報Ⅰ	コンテンツと制作	コンピュータ操作に課題を感じておらず、実践的な情報発信を目指す生徒
履修なし	情報Ⅰ	情報Ⅱ	コンピュータ操作に課題を感じておらず、実践的な情報処理を行える生徒

(2) 「協働的な学び」の機会拡大

新設科目によって、コンピュータ操作に不慣れ・慣れた・熟知した生徒に層分けができる。これにより、習熟度の近い生徒が集まる学習環境が期待できる。その結果、生徒同士が協力しあいながら作品または課題に対するアプローチ方法の共有、「協働的な学び」の機会提供に繋がることが期待できる。

4 令和6年度の課題と令和7年度以降に向けた展望

(1) 多様な実践の展開と学校全体での共有

「個別最適な学び」や「協働的な学び」について一定の共通理解を図りつつ、各教科の特性に応じて様々な実践が展開された。年度当初から次々と先進的な事例が実践された一方、研究テーマに対する実践の工夫に苦戦する職員もいた。そこで、試作レポートの検討会や年間2回のスクーリング互見月間など各教科の実践例や工夫点を共有する機会を設け、学校全体で理解度や認識の差を埋める取組を行った。恐らく令和7年度も一部の先駆者から革新的な実践が展開されると思うが、それらをなるべく早期に共有する機会を設け、学校全体で実践を深めていくことができるよう取り計らいたい。

(2) 通信制高校の特質を踏まえた「個別最適な学び」の実践の深化

「令和6年度の活動の概要」でも述べたように、文科6期の研究では「個別最適な学び」の実践が新たな取組となる。特に令和6年度は各教科の特性を生かした「個別最適な学び」に関する多くのスクーリング実践を集積できた。しかし、自学自習を中心とする通信制の特性上、少ないスクーリングの場でのみ機能する「個別最適な学び」だけでは不十分と言える。スクーリングの場を離れても自律的に学びを最適化し、深めていけるような仕組み（レポートやスクーリングのあり方）などについて、今後の研究と実践を積み重ねていく必要があると感じている。

(3) 「主体的・対話的で深い学び」に繋げるための実践

前述したように、研究テーマに関わる多くの実践を集積できたことは令和6年度の成果だが、実践自体が目的化している状況が散見された。そもそも、文部科学省初等中等教育局教育課程課から発出されている『学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料』では「個別最適な学び」と「協働的な学び」について次のように述べている。

未来の社会を見据え、児童生徒の資質・能力を育成するに当たっては、このような学習指導要領の趣旨を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、これまで培われてきた工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていくことが重要と考えられます。※

つまり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」はあくまで学習手段の一つであり、学習指導要領で規定された各教科の特性に応じた「主体的・対話的で深い学びの実現」とそれを通じた生徒の資質能力の育成が目的と言える。

令和7年度は学習手段そのものが目的化するこがないよう、本校における「主体的・対話的で深い学び」のあり方についての検討やそれを達成する手段として「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実践を深めていくことに取組んでいきたい。

※文部科学省初等中等教育局教育課程課.2021.“学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料”.文部科学省.https://www.mext.go.jp/content/210330-mxt_kyoiku01-000013731_09.pdf, (参照 2025-01-21)

2班 多様な背景を有する生徒に対する校内支援・指導体制の改善・普及

(横浜修悠館高校の学びのコミュニティプログラムの検証・改善・普及)

I 全体概要

本校は令和5年度までの研究事業の16年間で、多様な背景を有する生徒を支援するため、外部の教育的人材を活用した「学びのコミュニティ」を形成し、文科5期でその成果の検証と課題の設定、効果的な運営方法の試行錯誤を行った。

・トライ教室	学び直し、補習	外国につながりのある生徒への学習支援、生活支援
・架け橋教室	外国につながりのある生徒への学習支援、生活支援	
・キャリア・ポート	高校における通級指導教室（自校通級、他校通級）	
・キャリア活動 C	進路体験活動	

研究の目的（2班）

多様な背景を有する生徒に対する上記の「学びのコミュニティ」をはじめとする、校内支援・指導体制をさらに充実、改善することを主な研究目的とする。不登校経験の生徒を数多く受け入れている本校において、生徒が社会的自立のために必要な資質や能力を身に付けていける支援体制の整備は、開校以来のテーマである。

17年目の令和6年度は、以前からある支援体制をさらに充実させるため、在籍する生徒が抱える多様な背景や状況を適切に把握することから始めて、本校の学びのコミュニティなどプログラムの検証・改善・普及に努める。

定点観測的なアンケートによって、4つのコミュニティにつながっている生徒の様子のみならず、活動生（※1）の全体像および実態を改めて把握する。

具体的には、①学びのコミュニティにすでにつながっている生徒の学校満足度や充実度がどのようなものかを明らかにすること、②学びのコミュニティにつながっていないが潜在的なニーズのある生徒が活動生の中にどの程度いるのかを探ること。

加えての努力目標として、③そういった生徒がどのような状況にあり、どのようなアプローチが可能かを検証すること。

3年間を通じては、生徒の学校に対する気持ちの変化等、調査により得る数値のうち、変化のなかでも良いところは今後も強みとして維持し、そうでないところは課題として方策を検討し、改善していくと考える。

※1 活動生 …5～12月にかけてスクーリング出席、レポート作成・提出に取組む生徒のこと。

定点観測的アンケートについて

・調査テーマ	本校生徒の学校満足度や学校生活充実度、その他の学習や対人の不安等の意識と実態の把握
・調査時期	令和6年10月6日～10月13日
・調査方法	「履修ガイダンス（※2）」時にアンケートフォーム上で入力
・調査対象	活動生（令和7年3月卒業予定者および令和6年10月1日付転編入学者を除く）約1200名
・調査項目	学習面のつまずきに関する質問（先生に学習上の困ったことを言える、スクーリングが自分の学習ペースに合っている等）、学校生活に関する質問（学校で楽しく過ごしている、人間関係のストレスがある等）、入学満足度等。
・特記事項	回答数810名。質問のうち、学習に関する質問（14点満点）と対人に関する質問（14点満点）を集計。それぞれで支援が必要な生徒を「6点以下」と定義した。その結果、学習面で支援が必要な生徒は110名（13.5%）、対人面で支援が必要な生徒は76名（9.3%）であった（両方ともに含まれる生徒もいる）。
・その後	①アンケート内容をもとに、支援が必要な生徒のうち6名の動向観察および支援の手立てを検討 …生徒が学習面での課題をどのような状況で抱えているのか、具体的な事例として把握し、具体的な方策立案につなげるため実施。担任を通じアプローチ等行ったが、単位修得に至らない生徒が現状多い。 ②後期（12月）のトライ教室ツアー実施（後述）

※2 履修ガイダンス…令和7年度の履修科目を生徒が考えるための指導の時間のこと

2 各コミュニティの概要、今年度の取組と今後の課題

トライ教室

(1) 概要

トライ教室は、レポートに取組む生徒のうち、スクーリングの時間内や、職員作成の動画コンテンツだけでは思うように学習を進めることが難しい生徒、または中学校までの学習の学びなおしを必要とする生徒の「個別最適な学習」を支援するための、本校独自の支援体制である。

スクーリングがある週の月・水・木曜日の週3回、放課後相当の5・6校時の2時間開室する。トライ教室では本校職員に加えて、YSK(横浜修悠館) サポーターと呼ばれる教員経験者を中心とするボランティアが携わっている。

(2) 令和6年度の取組

①トライ教室ツアー

・実施に至る経緯

文科5期までの研究の中で、トライ教室の利用満足度は高い状態にあったが、「初めての場所へ入ることに抵抗がある」「一人で行くのは怖い」等、利用する前の段階でトライ教室に入りにくいという生徒や、そもそもトライ教室の存在を知らないという生徒もいた。

結果として、年間を通してトライ教室などの学習支援につながることのできない生徒がいるという課題を解消するため、トライ教室利用への橋渡しとして考案された。

トライ教室ツアーのため掲示したポスター



・経過

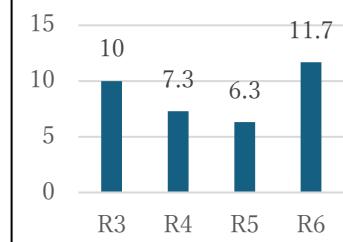
スクーリング開始月であり最も登校する生徒数が多いため、5月に6回のツアーを実施。具体的には、トライ教室開室すぐの時間に校内の分かりやすい場所(職員室前やラウンジ等)で教育相談グループの職員が目印を持って立ち、新入生をトライ教室まで誘導した。多いときは5~6人がツアーに参加して初めてのトライ教室利用に生徒をつなぐことができた。

結果、直近4年間の中でも、5月のトライ教室利用者の平均人数が最大となった。

5月の1日あたり

平均利用人数

(人)



・成果と課題

例年、5月は利用人数が少ない傾向にあったが、学校のシステムがまだよくわかっていない新入生に、まず存在を知ってもらう意義は大きい。トライ教室ツアーとして一種のイベント化したこと、一定数の新入生をつなぐことができたと考えられる。これを成功事例として、10月のアンケート内容をふまえて、レポートの年内最終締切日をふくむ12月にも同様のツアーを7度実施したが、この期間の参加者は少なかった。

12月こそ、年間を通じたレポート完遂のため特に大事な期間であり、支援を必要とする生徒は少なくないと考えている。そういった生徒をどのようにトライ教室などの支援体制につなげていけるかが、令和7年度の課題である。

②大学ゼミとの連携プロジェクト

・実施に至る経緯

令和7年度からのレポートのオンライン化に伴い、ICT機器の操作を含めた指導ができるYSK サポーターの需要が高まった。また、多様な生徒が集まるトライ教室は、大学等で教育業界を目指す学生にとって、教育実習とはまた異なる学びの場となると考え、本プロジェクトが始動した。本校の文部科学省研究調査事業の検討委員である中央大学 滝川幸加特任助教と連携して、中央大学・早稲田大学の学生計5名の参加がかなった。

・経過

合計5名の学生の合計30時間の参加が実現した。学生は生徒をよく観察し、それぞれの特性に合った学習支援の方法を編み出すなど学生ならではの柔軟な対応が見られた。

大学に配布したポスター



大学生YSKサポーターが学習支援を行う様子



○以下は参加した学生の振り返りアンケートより一部抜粋したものである。

項目 A 今回参加した目的

・以前に私が横浜修悠館高校を見学した際、トライ教室などのレポート課題の指導の場に人手が足りないと話を見聞き、大学生も導入してみてはどうかと提案したことを覚えています。この件が時間が経て実現し、ぜひ私も取り組みたいと思い参加しました。実際に生徒を指導することで、個人的にも貴重な経験が得られると考えました。

項目 B 生徒の学習支援を行う中で起こった気付きや学びとなったこと、今後活かしていきたいこと

・それぞれの生徒の学習で悩む部分には個性があり、いかに生徒と同じ目線に立てるかを考えることが貴重な経験でした。
・「自分の考えを書きなさい。」という問題が苦手な生徒が多いと感じた。このような問題を解かせる際、教師の意見の丸写しにならないようアドバイスをすることが難しい。答えではなく考える材料を提示して、生徒に考えさせることを念頭に置いた。

項目 C トライ教室に入り、「こうしたらもっと良くなる」と感じた点について

・生徒ごとに取り組みたいレポート課題の教科が異なっており、より専門性のある人が適材適所でスムーズに担当できるようになるとより良いのかなと思いました。
・問題を解く際どこまでさかのぼって教えるか、迷ってしまった。教材は普通高校レベルのものなので、その問題を解くには、中学以前の知識が必要となる。その前提となる知識がない生徒にそれらを一から教えることは時間的に難しく、理解してもらうことと、課題を終わらせること、どちらを優先せたらいいかが分からなかった。

項目 D サポーターに参加して自分の目標は達成されたか

・自分が今どこまでできるのか、逆にどういった指導が出来ないのかが見えてきました。まだまだ力不足であることを感じる同時に、これまでの成果も感じることができました。
・学習が思うように進まない生徒に対し、どのように教えたら楽しく学んでもらえるかなど、考えて行動する経験ができた。

・成果と課題

教育業界を志して学ぶ意欲のある学生たちは、積極的に生徒に関わって生徒理解に努めており、その存在は他の YSK サポーターや本校職員に対しても刺激となった。また、大学など多様な教育機関で先進的な教育に触れている学生と、今までになかったトライ教室への新鮮な改善案を協議することができた。学生の意見も、今後のトライ教室や学習支援の新たな改善のアイディアとしていきたい。また、令和7年度以降は連携先となる大学やゼミのつながりを増やして、本事業を拡充したい。

③トライ教室を利用する生徒へのアンケート

・実施に至る経緯

オンラインレポート提出への変化を予定するなかで、トライ教室のあり方について生徒の需要（ニーズ）・満足度の変化を測る必要を感じた。加えて、個別の考えを毎年収集することでより適切な改善を図ることができる。

○実施方法 生徒が個人端末やスマートフォン等でアンケートの QR コードを読み取る形で回答。

○結果 以下に主だった質問とその回答者数の内訳を掲載する。

問1 今年の4月から今回まで、トライ教室は何回目の利用ですか？

今回が初めて 2人 、 2~5回程度 2人 、 6~10回程度 5人 、 10回以上 6人

問2 トライ教室を利用することで、レポートは進んでいますか？

予定よりたくさん進んだ 7人 、 予定通りに進んだ 2人 、 自分でやるよりは進んだ 6人
あまり進まなかった 0人 、 まったく進まなかった 0人

問3 来年度も在校生の方は、来年度もトライ教室を利用したいですか？（原文ママ）

今年卒業します 6人 、 今年以上に利用したい 3人 、 今年程度に利用したい 6人
今年より利用しない 0人 、 利用しなくてもよい 0人

問4 トライ教室を利用したきっかけを教えてください。※ 複数回答可

【すすめられた人】

担任の先生にすすめられた 5人、 教科の先生にすすめられた 1人
その他の先生にすすめられた 1人、 トライ教室ツアーがきっかけ 2人

【利用した心情的な理由】

スクーリングに参加しづらいため 2人、 スクーリングでレポートが終わらなかったから 9人
スクーリングの先生には聞きづらかったから 0人、 その他の理由 4人

○このアンケート結果について

利用生徒の満足度が高いことが分かったが、レポートが完成せず、単位修得に至らない生徒も依然として一定数おり、それがアンケート数値に表れないことも分かった。トライ教室を必要とするがまだつながっていない生徒に届くようなアプローチをさらに工夫しつつ、トライ教室に来室した生徒の満足度も一層上がるよう検討していきたい。

(3) 今後の課題

令和7年度に向けて、ほとんどの生徒が紙レポートに書く形式を選んでいた状態から、オンラインで提出するレポートへと完全に移行し、学習の形態が大きく変化する。その中で支援するYSKサポーターへの職員側からのサポートや、うまく取組めない生徒への特に初動のサポートを充実させ、今後も存続する体制を目指す。

(4)トライ教室利用者の10月のアンケート結果について

- ・810名のうち、93名(11.4%)が利用していると回答。(実際の利用生徒であることは確認済)
- ・93名中、90名(96.8%)が「問2 横浜修悠館高校に入学して良かったと思いますか」という質問に対して「良かった」と回答(左側の円グラフ)。トライ教室利用者の入学満足度は非常に高いといえる。

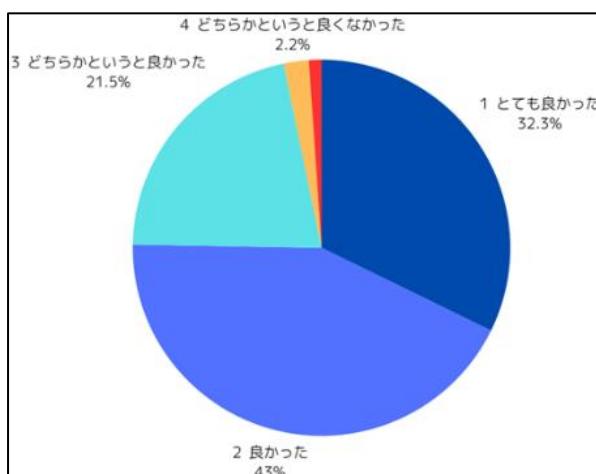
【内訳: ①とても良かった 30件、②良かった 40件、③どちらかというと良かった 20件】

- ・93名中、81名(87.1%)が「問10 横浜修悠館高校に入学し、学校生活は充実しているか」という質問に対して、「充実している」と回答(右側の円グラフ)。満足度と比べて充実度は少し下がるが、全体810名のときの76.9%と比べると約10%高く、充実していると答える生徒が比較的多い。

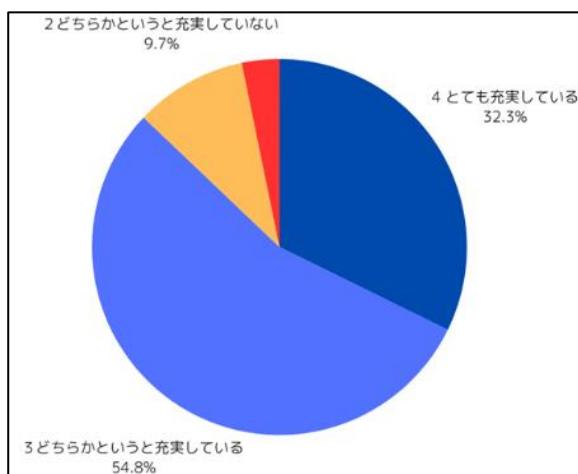
[まとめ]

- ・この結果から、トライ教室につながっている生徒の満足度と充実度が明確に高く、学習が進んでいること=満足度、充実度に直結していることが分かる。今後も校内で【学習が進んでいない】生徒に第一に勧める取組である。
- ・利用者満足度について令和6年度(のみならず過去3年間)も高い数値であるため、2班はつぎの目標を掲げている。
 - ①オンラインレポートを導入したあとの令和7年度も、既知の利用者生徒の高水準な数値をキープしていくこと。
 - ②令和7年度新入生を含めて、新規利用者が増えた後も、利用者満足度の高水準な数値をキープしていくこと。

問2 入学満足度を聞く質問（6件法）



問10 学校生活の充実度を聞く質問（4件法）



悠ルーム

(1) 概要

悠ルームとは、本校の職員室と同じ廊下に面した一室に設定した、カームダウン・クールダウンスペースの名称である。

教室やラウンジなどを騒がしいと感じて静かな場所で過ごしたい生徒や、パニックを起こして落ち着く場所が必要な生徒のために、開放している。平日スクーリングのある日の午前中は、前述の YSK サポーターが受付として常駐し、入退室生徒の把握および見守りをしている。トライ教室の開室時間には、自学自習が可能な生徒の自習室として開放した。

(2) 令和6年度の取組(特記事項)

開校当初から運営してきた悠ルームであるが、6期初年度として、「生徒の入室数が少なく、スペースの有効活用が出来ていないこと」を課題とした。改善策を担当の教育相談グループで検討した結果、要因の一つとして「冷たさを感じる無機質な部屋の様子」があげられた。そこで、生徒の力も生かした以下の改装を行った。

●LOVOT(ラボット)の導入

LOVOT は、GROOVE X 社が開発したコミュニケーションロボットである。音がしたり、人を見つけたりすると、自動で反応する。愛くるしい声で返事をし、そばに寄っていく。撫でたり、抱き上げたりすることで喜ぶ様子やリラックスする様子を見せる。初めて見た人でもかわいらしさを感じられるため、愛情を育んでいくことが出来るロボットとして期待されている。小学校や大学での導入には先例があるが、高校での導入例は今までないとのことである。

導入に際しては、LOVOT が悠ルームにいることについての校内の認知度を上げるために、いくつかの取組を行った。

左：悠ルーム前の廊下に出てきた LOVOT を介して、交流が生まれている様子。

中：ロボットを題材にした一部のスクーリングで、LOVOT が教材となった様子。

右：LOVOT の正式導入時、名付け親の生徒のインタビューとともに広報用に作成した校内掲示のポスター。



先に「LOVOT インターン」(試験的導入)を行い、生徒たちの LOVOT に対する感触を確かめた。

正式導入が決まり、LOVOT の呼び方を生徒からの公募制として、挙がった候補の選定も、生徒からの投票で決定するイベントとした。後期からは LOVOT 常駐状態であったが、「LOVOT に会いたいから」という理由で悠ルームによく来室する生徒もいて、今後の悠ルームの活用度が高まるきっかけとして期待される。

●内装のリフォーム

無機質であった空間の改善のため、内装をスクーリングのない夏季期間に刷新した。

温かみや親しみやすさを感じられる穏やかな色に統一。新たにソファーやリクライニングチェアを購入し設置した。改裝を際して、道具の搬入・搬出や壁のペンキ塗りなどを生徒会の生徒に担ってもらった。加えて、壁の一面に「鯨」のイラストを描くことになり、美術部の生徒がデザインして描き上げた。本書の表紙に採用されたのは、この鯨の絵である。

悠ルームのビフォーアフター（左：改装前、右：改装後の写真）



改装中の生徒の様子



(3) 今後の課題

教室を模様替えし、LOVOT を導入したことにより、悠ルームを訪れる生徒の数は増加した。しかし、本来の目的である、静かな場所を求める生徒が「ゆっくり過ごせる居場所・空間」として利用する様子は、あまり見られていない。
LOVOT を活かすこと、悠ルームの活用法の認知度を今後もあげていくことを、令和7年度の引き続きの課題としたい。

架け橋教室

(1) 概要および令和6年度の架け橋教室の利用状況について

架け橋教室は、外国につながりを持つ生徒の学習支援、および居場所づくりを目的とした支援体制である。

外国につながりを持つ生徒は、学習言語としての日本語が十分に身についていないため、学習が滞ることが多い。

また、将来への展望が描けない、友人関係をうまく築けないなどの不安から、いつの間にか学校から足が遠のくことが少なくない。架け橋教室ではそうした生徒に対し、職員や学習支援員や多文化コーディネーターの個別指導を通じて、組織的な学習支援を日常的に行っている。この教室の副次的效果として生徒同士が知り合い同士となって、悩みを相談する間柄や、少なくともお互いの話し相手となる等、おだやかな人間関係を築くコミュニティとなっている。

●開室時期

架け橋教室は、火・水・木曜日の 11:00～14:00 に校内の一教室を使って学習支援を行っている(スクーリングのない期間は不定期開室)。

架け橋教室の様子



●利用状況の推移

令和6年度、本校に在籍する外国につながる生徒は約 120 人。

教室の利用実績がある生徒は 38 人(利用率で約 3 割)である。

令和6年度の架け橋教室の利用状況は図 1、2 のとおりである。スクーリングのある期間(5～7月および10～12月)には一日あたり平均 6 人程度の生徒が利用し、年間を通しての利用件数は過去4年間で最も多くなっている。

図 1

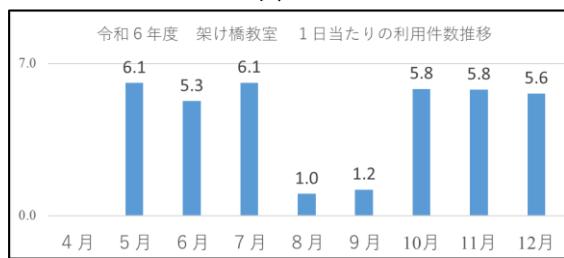
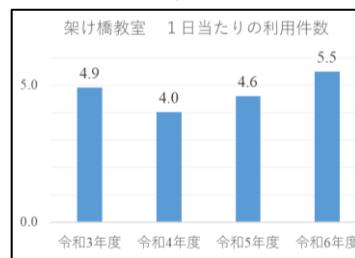


図 2



(2) 令和6年度の取組(特記事項)

●架け橋教室を利用する生徒へのアンケート

令和6年度の利用者に対して記述式アンケートを実施した。アンケートは①架け橋教室を利用してよかったです、②もっとこうしてほしかったことの2点について。架け橋教室をよく利用する生徒7名から回答を得た。

①については7名全員が「友達ができたこと」、「レポートが扱ったこと」の2点を挙げた。そのほかに、「校内での明確な居場所ができたこと」「ラウンジは日が悪いと話し声が大きいが、架け橋はのんびりできて集中しやすい」など回答があった。本校内には何か所か自習スペースがあるが、その一つであるラウンジは私語の騒がしい日も多い。架け橋の教室は、ラウンジを避けて静かに落ち着いて学習に取り組める場所であるほか、昼食をとる場所としても利用されている。

②については、「特にない」と回答した生徒が半数以上であった一方、「勉強しに来ている子をあまり制限せずに入れてほしい」という回答があった。架け橋教室はもともと、外国につながりのある生徒に向けた取組から始まっているため、一般生徒の利用に関して職員の判断で制限することがある。令和6年度も、外国につながりのある生徒以外に、架け橋教室内で一緒に学習に取り組む生徒の姿はあった。しかし、完全に制限をなくして誰でも利用できる場にしていった結果、本当に架け橋教室を必要としている生徒が居づらさを感じてしまうことがあれば、本末転倒である。架け橋教室の運営は今後もバランスを考えながら進めていく必要を担当者は感じている。

●令和6年度の生活体験発表会について

生活体験発表会は、神奈川県高等学校定通教育振興会文化部主催の、定時制・通信制に学ぶ生徒が学校生活を通して得た体験を発表する場である。

本校からは例年、架け橋教室を利用する生徒の一人が、自分の来歴、本校での学校生活や架け橋教室での仲間との交流などを題材とした発表をしている。令和6年度の代表生徒は故郷のウズベキスタンについても触れたスピーチを、民族衣装を着て行い、5位

入賞を果たした（写真の左から2番目）。また、本生徒はこの発表の経験も活かした推薦型選抜の大学受験で、第一志望校に合格し、進学予定である。本生徒は、「もし全日制の学校を選んでいたら、このような発表会に向けて準備をする余裕はなかったと思う。」と語っている。「私は学校生活で特に困ることがなかったので、入学当初から架け橋教室を利用していたわけではなかった。しかし、学校生活に対する困難の有無にかかわらず、国際交流も架け橋教室の役割の一つであることを多くの生徒に周知する工夫があれば、もっと良い空間になると思う。」とも語ってくれた。生徒の居場所のみならず、国際交流の場、発信の場としての架け橋教室、様々な生徒が利用できる架け橋教室づくりは、この3年間の課題の一つとしたい。



(3) 今後の課題

前述のとおり、開設当初は外国につながりのある生徒のためのプログラムとして始まった架け橋教室であるが、段々と一般の生徒の利用も増え、それがポジティブな方向に働く様子も見られる。一方で、以前に外国につながりのある生徒が一般的の生徒を連れてきたときの話し声が大きかったことが原因で、本来架け橋教室を利用すべき生徒が居づらさを訴えた事もある。慎重に判断しながら、一般的な生徒も含めた「国際交流の場」として、架け橋教室の環境の充実と改善を両立させたい。

(4) 架け橋教室利用者の10月のアンケート結果について

- ・810件の回答のうち、10名（1.2%）が利用している。（実際の利用生徒であることは確認済）
- ・10名中、10名が「問2 横浜修悠館高校に入学して良かったと思いますか」という質問に対して「良かった」と回答。
- 10名中、10名が「問10 横浜修悠館高校に入学し、学校生活は充実している」という質問に対して、「充実している」と回答。架け橋教室利用者の学校満足度と充実度は、ともに100%であった。

【学校生活充実の理由に関する記述の一部】

- ・自由な時間が多いためアルバイトをしたり、学校外の学びの時間をもてたから。
 - ・授業の半分以上は出されているしレポートも順調に進んでいるから。
 - ・友達がたくさんできたから
 - ・生活習慣が改善できたり、友人ができたりで充実していると感じたため。
- ・一方で、問11「レポート取組の調子」をきく質問について、10人中4人が順調に進んでいないと答え、問16「スクーリングが自分の学習ペース」に合っているかの質問には10人中3人が合っていないと回答。

【学習に対する記述の一部】

- ・苦手な記述問題で行き詰まっている

[まとめ]

- ・学習のみならず日常的な会話等で、支援員や職員、校内の友人と結びつく居場所であり、それが入学満足度や学校充実度に表れたと推察される。架け橋教室は今後も校内で【外国つながりなどの多様な背景を持つ】生徒に第一に勧める教室となっている。
- ・少人数ではあるが利用者満足度についてとても高かったため、2班はつぎの目標を掲げている。
 - ①オンラインレポートを導入したあとの令和7年度も、既知の利用者生徒の高水準な数値をキープしていくこと。
 - ②令和7年度新入生を含めて、新規利用者が増えた後も、利用者満足度の高水準な数値をキープしていくこと。

キャリア・ポート

(1) 概要

キャリア・ポートは、本校の「通級による指導」講座の名称である。この名称は、生徒にとってのこの講座が、自立した生活を送る準備の機会となって、旅立つための「港」のような場所にしたいという本校職員の願いから命名された。

講座の内容は、通級による指導の目的に添い、生徒個々の実態に応じ学習や生活上の困難を克服することを目指した活動を行っている。本校では特に次の3点を重視している。

- ・生徒が安心できる環境を整え、安心して過ごせる居場所となること
 - ・小集団へのチームティーチングを行い、コミュニケーション力を養うこと
- 例: 今年度の「キャリア・ポート(木曜4校時)」では、生徒18名に対して教員12名が担当した。
- ・将来の自立と社会参加を目標に、「働くこと」をテーマにした活動を行うこと

開講設定日は、月曜日の1校時または木曜日の4校時、日曜日隔週2時間(他校通級指導)の3展開である。前期に9時間、後期に9時間の年間18時間開催するほか、校内外の体験活動を行っている。職員が設定するワークのほか、外部機関の見学や校内外での作業体験、就労移行支援事業所等のスタッフによる講演会等を開催している。

(2) 令和6年度の取組

●木曜日講座の2展開(今年度が初の試み)

・生徒の実態に応じた展開の工夫

キャリア・ポート内でも昨今のテーマである、「個別最適」をキーワードとした実践を行った。

まず履修登録した生徒数が多い木曜日のキャリア・ポートを、つぎの3月卒業予定者で主に構成するAクラスと、他の生徒で構成するBクラスの2クラス展開とした。Aクラスは、卒業後の進路を見据えているため、就労移行支援事業所や就労継続支援B型事業所等への見学を積極的に行なった。キャリア・ポートを初めて受講する生徒も多いBクラスでは、ゲームやアクティビティの機会を積極的に設定して、「キャリア・ポートの時間は安心できる自分の居場所」という認識を育むことを第一とした。その安心感の中で、それぞれの生徒の良いところを伸ばせるように担当者でワークを考案し、実践した。

・生徒の実態に応じた学習内容の工夫

キャリア・ポートに参加する生徒には、他者とのコミュニケーションが苦手なことを自覚して克服したいという意欲があるが、なかなか他者を前に言葉が出てこないといった、対面でのコミュニケーションが苦手とする生徒が一定数いる。また、令和7年度より全科目のレポートでオンライン提出化することが生徒・保護者に周知された際、キャリア・ポート受講の生徒や保護者からは「PCを使ったことがないため来年度は学習を継続できない(かもしれない)」、「キーボード入力ができないため、来年度の学習が今から不安だ」など相談を受けた。

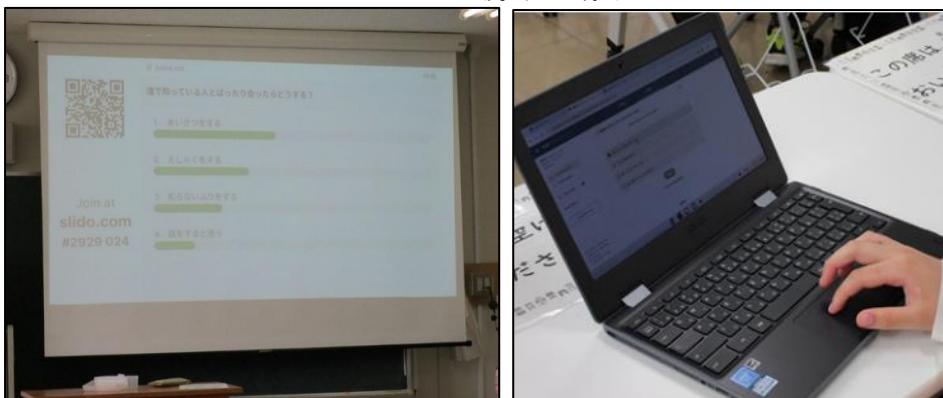
これらの状況から、ICT機器を積極的に使用し、オンライン上でコミュニケーションや自己表現を行うプログラムにニーズがあると考え、実施した。また、生徒が自分のレベルに合わせた参加方法を選択できるようにしたり、段階的に直接的コミュニケーションを要する課題を課したり、力が伸びてきたと感じられる生徒には今までレベルが少し上がる取組に挑戦するように担当職員から声かけを行ったりすることで、年間を通してICTへの苦手意識の改善やコミュニケーションスキルの向上を図った。

以下は、木曜日 B クラス生徒の具体的な取組の紹介である。

①アプリケーション(Slido および Padlet)の画面上でコミュニケーションをとり、他者理解や自己紹介活動を行う様子

前期4回目のスクーリングで「友人や他者との付き合い方」をテーマに実施。生徒は前半部分で Slido を通じて、他者や友人との付き合い方をシチュエーション別で回答した。即時的に他の生徒の回答が確認できるツールであり、各シチュエーションでどのような対応をとる人が多いか、可視化できた。その上で、どのような対応が適切か、考える時間をとった。

Slido を使用する様子



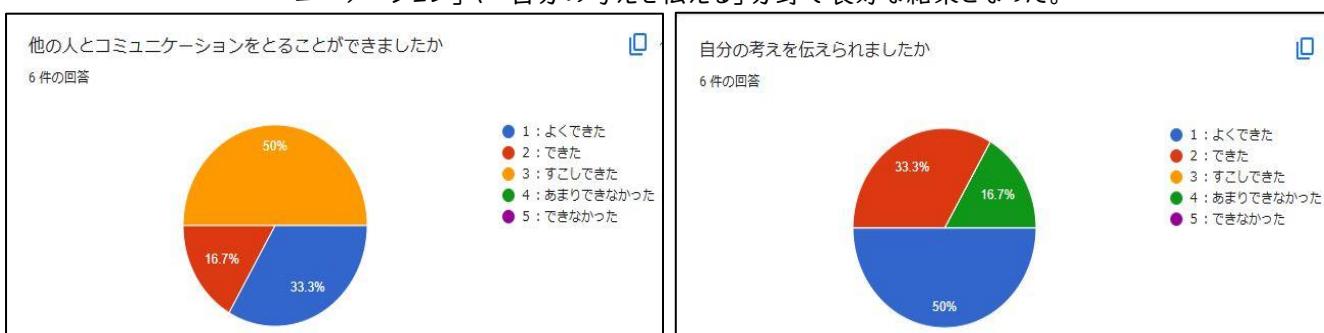
後半は Padlet を用いた自己紹介を行った。生徒は自分の紹介文が入力できたら、他の生徒の自己紹介文に「いいね！」を押したり、コメント投稿をしたりするよう、担当者から指示した。直接のコミュニケーションに抵抗感がある生徒や言葉を発するのに時間がかかる生徒も、これなら取組めるという参加のレベルを選択し、他者との交流を行えた。

Padlet を使用する様子



当日の振返りアンケート結果の一部(↓)。意見共有ツールの活用ができたからか、「コミ

ュニケーション」や「自分の考えを伝える」分野で良好な結果となった。



②文化祭に向けて、スライド作成+プレゼンテーション発表を個人で行う活動の様子

後期2・3回目で実施。従来のキャリア・ポートは模造紙を用いての活動紹介の掲示がゴールであったが、令和6年度は職員が用意した型に自分の感想や考えを入力する形で、スライド作成を行う方法に変更した。生徒がスライド作成する際、どのスライドの編集を担当するか、その量、またプレゼンテーション発表を行うかどうかも、それぞれの力や意欲に合わせた選択式にした。出来あがったスライドでプレゼンテーション発表を行った様子は、文化祭で放映した。

生徒はプレゼンテーション発表を行う当初緊張していたが、何度も撮直しができると担当者から伝えて、練習とリハーサルを入念に行ったところ、最後は笑顔も見せて堂々とした発表になった。スライドに入力した以上のこと話をせる生徒もいた。

生徒Xの作成したスライド

生徒Yの作成したスライド

プレゼンテーション撮影の様子



当日の振り返りアンケートより【参加した全員ができた回答(1,2)であった】

自分の考えを伝えられましたか 5件の回答	今日「できた」と思うことを書こう。 3件の回答
 ● 1 : よくできた ● 2 : できた ● 3 : すこしうけた ● 4 : あまりできなかった ● 5 : できなかつた	自分の考えを伝えることができた。 プrezentーション スライドに写真乗せた。

③アプリケーション(Figma)を用いて「働くうえで大切にしたいこと」を共有する活動の様子

後期4回目の活動として、「働くこと」をテーマに探究活動を行った。ヨシタケシンスケ著『おしごとそだんセンター』(2024、集英社)を活用した。

まず一人一人が働く上で大切にしたい言葉を、生徒自身が本文中から探す作業を行った。その上で、Figma の画面上の付箋へ言葉を入力し、貼っていった。その後、他者の付箋を読むことも指示し、その中で良いと思った他の人の言葉にスタンプを3つ以上押すことをノルマとして課した。(自分で言葉を打ち込むことが難しい生徒には、「スタンプだけでも押してね」と助言を行った。)

事前に葉のない木のイラストを背景として用意し、生徒の付箋によって完成した木を「ワークツリー」と名付けて、次回以降の職業研究のモチベーションになるように企図した。生徒によって、配布した本文の多くの部分にマーカーを引く生徒、慎重に自分に合った言葉を選ぶ生徒、一人で何枚も付箋を置く生徒、時間をかけて一枚の付箋を置く生徒など、それぞれの力に合った参加の形が見られた。

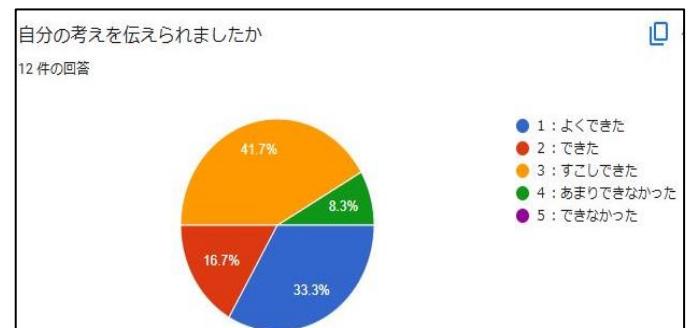
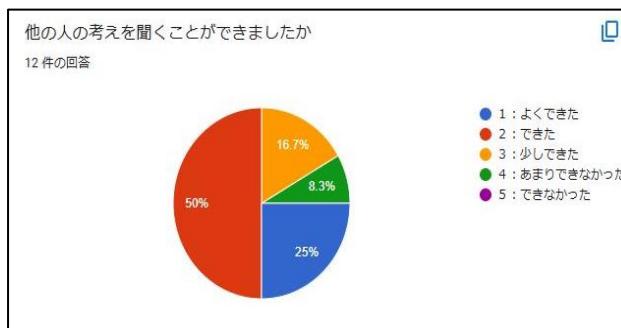
スクーリング時間内の作成物「ワークツリー」

②はたらく上で大切なもののってなんだろう？

1. ヨシタケンシスケ「お仕事相談センター」を読んで、大事だと思った言葉を付箋で入力して、「ワークツリー」の葉っぱにしよう。付箋の色は好きなものを選んでOK!



当日の振返りアンケートより【できた回答(1~3)が大半であった】



④協働で職業インタビューおよびその振返りのスライド作成を行う活動の様子

後期6回目の活動である。「働くこと」をテーマにした11月のメイン回として、実際に近隣の商業施設に出向いての職業インタビューを行った。キャリア・ポート木曜日の生徒で3チーム作り、チームごとに異なる店舗を訪問した。

その後に職業インタビューで聞き取った内容の振返りを、同チームのメンバー間の共同作業（スライド作成）の形で行った。文化祭の時は個人作業であったため、初めての協働でのスライド作成機会となった。チームごとに店舗名、各項目別の内容追記、それぞれが一言ずつ感想を記入するなど、生徒たち自身で役割分担できていた。

タイピング（入力）のスピードに差があることに気づいた生徒が、入力が苦手な生徒のフォローに回る等の姿も見られた。

近隣の商業施設で行った職業インタビューの様子



生徒がチームごとに協働で作成したスライド。

※左のスライドの「考えたこと・感想」内の四角で隠している箇所は、それぞれの生徒の感想の後に、それを聞いた生徒が署名した部分である。ほか、店舗名の位置も隠している。

INTERVIEW REPORT

こんなお店です

自然由来のものを扱っている。リサイクルに力を入れてる。無印良品は衣服、生活雑貨、食品という幅広い品ぞろえからなる品質の良い商品として、1980年に日本で生まれた無印良品とは「しるしの無い良い品」という意味。

インタビューしてわかったこと

毎週、商品の入れ替えをしている。形を気にせず、バームクーヘンをはんぱいしている。だから安く販売できる。ヨミにならないように自然に変えるときどうするかを考えている。廃校になった体育馆の床を再利用していた。

考えたこと・感想

お客様を大事にしていて無印が人気の理由がわかった。

自然由、廃校の資源等を使って商品をつくっているのがすごいとおもいました。引き続き愛用し続けたいです。

コーヒーがあった
椅子が体育馆の床だった

INTERVIEW REPORT

こんなお店です

食料品売り場（こだわりの逸品）

インタビューしてわかったこと

・人気の商品は大人のしゃけけめんたい
・心がけていることはお客様がお買い物を楽しんでもらえるようになります
・嬉しかったことは、今日、買い物に来て良かったと言つてもらえたこと
・このお店で働き始めた理由はおいしいものがたくさんあってすきなお店だから

考えたこと・感想

店員さんの笑顔が素敵だった。いろいろなご飯のお供がたくさん売っていた。ご飯のお供以外にもバタソースなども売っていました。誰かにお土産としてあげたくなるくらい美味しいそうでした。
買い物をしてみたいお店でした。

大瓶 125g

当日の振返りアンケートより【苦手としている「他者とのコミュニケーション」ができたと7名が回答】

他の人とコミュニケーションをとることができましたか

8件の回答

評価	割合
1:よくできた	37.5%
2:できた	12.5%
3:すこしうけた	37.5%
4:あまりできなかった	12.5%

今日「できた」と思うことを書こう。

7件の回答

仲間と協力できた
入力作業
パソコンで、文章を打つことができた。
pcに振り返りの入力ができた。
発表（リハーサル）
大きな声で発表できた
サクサクとスライド作りを進められました！

⑤「1年間の振り返り」内容を協働でスライド作成し、キャリア・ポート参加生徒全員に向けて発表活動をする様子

後期7~9回目の活動である。12月15日(日)に校内外に向けた「キャリア・ポート活動発表会」を予定していたので、生徒は年間の活動の振り返りをスライドで作成した。集大成として、一つのスライドを参加生徒全員で編集し、発表会も協働で発表を行った。生徒の入力後、職員相手に発表の練習をしてフィードバックを得るように指示した。

一年間を総括するシートに、年度当初はキーボード入力が出来ないことやICT機器に触れること自体に不安を感じていた生徒含めて、全員が積極的に入力を行えた。プレゼンテーション発表準備の時点では、それぞれが自分に合った箇所と分量を選択した。最後の発表の際は、発声を苦手とする生徒も短いながら声を出して発表できた。

左:当日使用したワークシート 右:生徒が協働で作成した「振返りシート」の一部

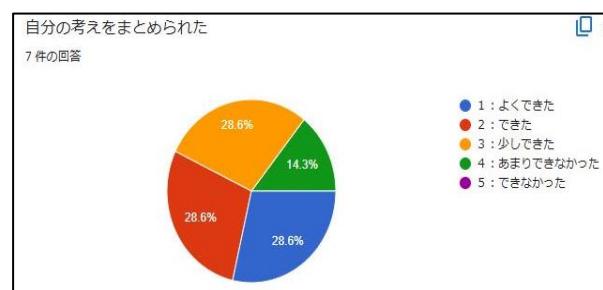
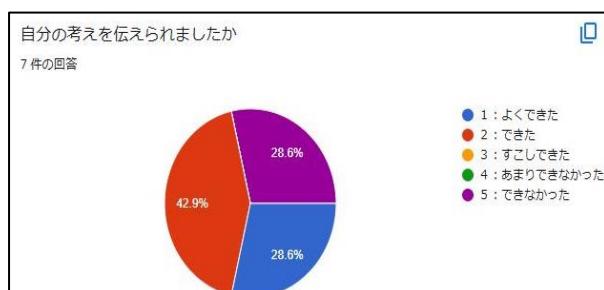


当日の振返りアンケートより

左:概ね「できた」と回答。

ただし、発表時に声を出すことが出来なかった生徒2名は「5 できなかった」と回答している。

右:概ね「できた(1~3)」と回答。「4 あまりできなかった」とした生徒へは、「スライドに自分の考えを言葉にして入力することは、自分の考えをまとめられたにあたると思うよ!」と担当から伝えた。



今日「できた」と思うことを書こう。

3件の回答

発表ができた。

振り返り結構書けた

発表できた

(3)個別生徒の年間を通した変化(具体的な事例)について

ケース A(以下、生徒 A と表記する)

①本人の特性・キャリア・ポート受講前の状況

生徒 A は、自閉症スペクトラム(※3)の診断を受けており、こだわりが非常に強い。家庭ではよく話すようだが、学校では担任教諭に単語一言を伝えるのが精いっぱいな様子。教科スクーリングへの参加や単位の修得は保護者のバックアップもあり順調であるが、レポートに「あなたの考えを書きなさい」等の自由回答形式の問い合わせがあれば、そのたびに困難を感じている。保護者からの自立のためにも、「トライ教室」への参加を再三呼びかけていたが、首を横に振られていた。

あるスクーリングの中で、例えば Google スプレッドシートを用いた協働学習をする場面では、画面を見つめるのみで入力が進まない一方、二者択一や5段階での選択式の方法には回答する様子が見られていた。

②キャリア・ポート受講後の変化

生徒 A は、令和7年度からのレポート作成、提出のオンライン化の本校からの知らせに困惑した。保護者も「PC を使ったことがないため来年度は学習継続を危惧している。退学も検討している」との旨の相談を担任に伝えた。

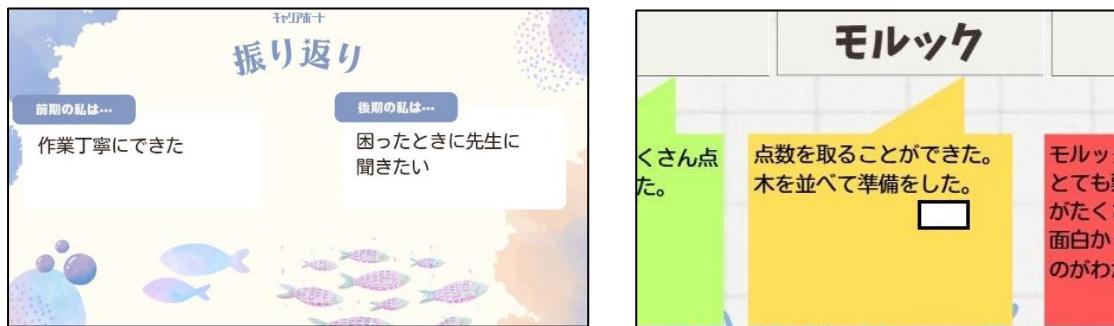
前述の活動(2)①内での Padlet や Slido への回答は画面を見ているのみで、入力を行うことはなかった。前述の活動(2)②の「文化祭」に向けてのスライド作成では、キーボードをひらがな入力モードに変えたところ、一枚のスライドへの入力ができた。前述の活動(2)⑤の「1年間の振り返り」では、自力かつローマ字入力で複数箇所に振り返りを入力することができた。また、キャリア・ポート参加により、担任だけでなく他の職員とも少しずつコミュニケーションをとれるようになった。

更に、キャリア・ポート受講前は足が向かなかったトライ教室へも、自分の判断で参加し、YSK サポーターとコミュニケーションをとりながらレポートの学習を進めることができている。

生徒 A が作成したスライド

左：(2) ②の「文化祭」の際の作成スライド

右：(2) ⑤の「1年間の振り返り」の際の作成スライドで、生徒 A が貼った付箋部分



ケース B(以下、生徒 B と表記する)

①本人の特性・キャリア・ポート受講前の状況

生徒 B は、自閉症スペクトラム(※3)の診断を受けている。中学校のときはほとんど登校できず、本校入学時も登校に対する不安は強く、スクーリングも保護者が事前の申請のうえ、出席時は全て同席。職員を含め、保護者以外はコミュニケーションをとることが難しい生徒であった。

※3 自閉症スペクトラム(ASD)は DSM-5 では自閉症スペクトラム障害と表記されているが、本文中は生徒が本校に入学した時の名称で記載した。

②キャリア・ポート受講後の変化

キャリア・ポートにも基本的に、保護者が生徒Bの隣に座っていた。当初は担当からの呼びかけに直接の反応はなく、保護者を介して指示が伝わるという具合であったが、前期のキャリア・ポートの活動のなかで行った「芋ほり」や「モルック」等のアクティビティを行うときには積極的に参加することができて、段々とキャリア・ポートに対して馴染んでいく様子を観察することできた。

後期の前述の活動(2)②の「文化祭」に向けてのスライド作成のときは、保護者が教室に同席しなくても教員とコミュニケーションをとり、スライド作成を進められた。更に、自作のスライドをもとにプレゼンテーション発表にも取り組み、自信を持って臨む様子が見られた。文化祭のスライドは、単語一言の入力であったが、(2)⑤の「1年間の振り返り」では、特段のサポートなしで長文での入力を行うことができ、プレゼンテーション発表は大きな声を発することができた。通常科目のスクーリングも一人で参加するようになり、年内で最も大きな成長が見られた生徒となった。

生徒Bが作成したスライド

左：(2)②の「文化祭」の際の作成スライド

右：(2)⑤の「1年間の振り返り」の際の作成スライドで、生徒Bが貼った付箋部分



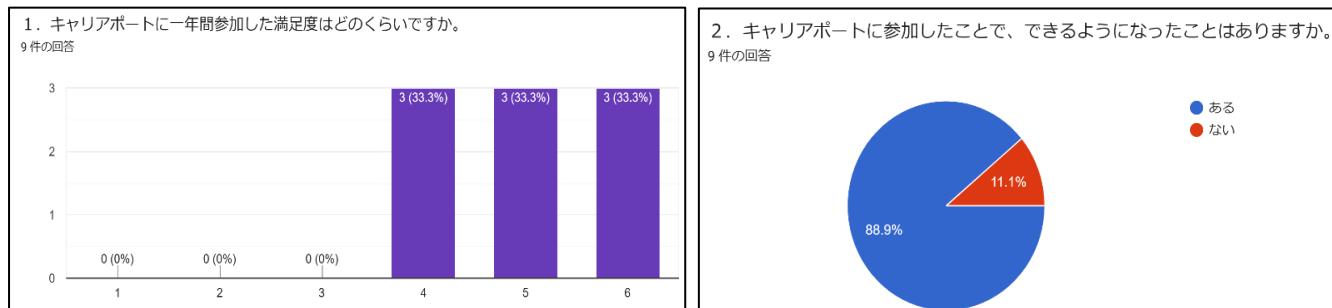
(4)今後の課題

スクーリング時間内に実施した、令和6年度の振り返りアンケートは良好な結果であった。今後も、安心できる・力が伸ばせる居場所としての面を維持していきたいと考えている。

令和7年度は特に次の点を改善する。

- ・ICT機器上に留まらない、直接的なコミュニケーションを介した協働的な学習活動の導入。
- ・年間を通じての、キャリア・ポート内に生徒2~3名と職員1名のチームづくり。職員とのより強い信頼感の醸成。
- ・参加生徒にとって心理的安全性の高い居場所とするため、生徒の書く課題と達成目標から、キャリア・ポート内で取り組みたいことを吸い上げ、実践に反映してみること。

キャリア・ポート(木曜日) 参加者全体に行った1年間の振り返りアンケートより



(5) キャリア・ポート受講生徒の10月のアンケート結果について

- ・令和7年度にまだ学校に在籍する予定の11名のうち、6名が回答。(実際の利用生徒であることは確認済)
- ・6名中、6名が「問2 横浜修悠館高校に入学して良かったと思いますか」という質問に対して「良かった」と回答。受講生徒の学校満足度は100%であった。
- ・6名中、5名が「問10 横浜修悠館高校に入学し、学校生活は充実している」という質問に対して、「充実している」と回答。残り1名については、この結果を受け、今後も寄り添っていく。

【充実の理由に関する記述の一部】

- ・友人が出来たから
- ・一方で、問11「レポート取組の調子」をきく質問について、6人中3人が順調に進んでいないと答え、問16「スクーリングが自分の学習ペース」に合っているかの質問には6人中3人が合っていないと回答。

【学習に対する記述の一部】

- ・自分の解答に自信がない
- ・高校に上がって急に、今までやってた自分のレベルが一気にupしたので、卒業するまでに追いつけるかどうかが自分でも分からなから。(原文ママ)

[まとめ]

- ・学習面での遅れなどはあれども、キャリア・ポートの週1度の出席は学校内外の生活リズムを維持するのに役立ち、気持ち等にメリハリをつける機会となっている。また、顔見知りの職員やクラスメートが多いことが、満足度や充実度が高い結果の一因となっていると考えられる。
- ・一方で、学習や高校卒業後に対する生徒の不安は、技能面などを含めて、切なるものがある。キャリア・ポートなど通級指導は今後も校内で【就労支援や特別な支援を必要とするかもしれない】生徒に第一に勧める教室となっている。
- ・少人数ではあるが受講者ほぼ全員が前向きな回答をしてくれているため、2班はつぎの目標を掲げている。
①オンラインレポートを導入したあとの令和7年度も、既知の利用者生徒の高水準な数値をキープしていくこと。
②令和7年度新入生を含めて、新規利用者が増えた後も、利用者満足度の高水準な数値をキープしていくこと。

キャリア活動

(1) 概要

本校では、多様な背景を持つ生徒一人ひとりに対する働きかけとして、学習のみならず、卒業後の進路決定、進学や就職の不安と共に乗り越えていく支援をするべく、校内体制を構築し、充実させていけるかを常に課題としている。

(2) 令和6年度の取組(特記事項)

●進路探求映像講座を用いた集合ワークの機会について

・実施に至る経緯

令和6年度は経済産業省との関係で城南推薦塾(総合型・学校推薦型選抜対策塾)の「動画の視聴」および「担当者の来校による定期相談」、「1回の添削指導」を受けるのに生徒は無料となつたため、卒業予定生徒の参加を募り、説明会を5月15日に実施。

(※ 動画視聴のためのIDを付与した生徒総数は26名)。

城南推薦塾の方を招いての
放課後集合ワークの様子



・経過

城南推薦塾(以下、城南という)の担当者が来校するのは水曜日の5・6校時(14:10~16:00)とし、「自分で動画をみて取り組むのよりも、学校の教室で進めていきたい生徒」を対象として集合ワークと題し計4回(6月5日・12日、7月3日・10日)行った。参加生徒は毎回10名程度で、全4回出席の生徒は3名であった。

7月17日を期限とした「(志望校への提出を想定した)志望理由書」の下書きを提出できたのは計10名である。城南の担当者に渡し、7月末には添削された文章が戻ってきた。クラスルームを通じてデータで生徒に返却した。

・まとめ

集合ワークに2~3回以上出席した生徒を中心に10名が課題の文章を仕上げることができた一方、動画視聴のみの生徒の提出はそのうちの1名であった。通信制高校で集合ワークを行うにも頻度や回数の設定などは難しい。城南の担当者の方には厚くご指導いただき、合格を得て感謝を伝えた生徒もいる。令和7年度の継続や工夫を検討予定である。

生徒の振返り文章の例(11月末に生徒ご回答したアンケートの一部)

問8【必須回答項目】 城南の担当者さんに伝えたいことはこちらへ。感謝の言葉(メッセージ)も、ここにあることは伝えます。 特になしでも可。	問9【任意回答部分】 修館のキャリアGの教員(学校)に伝えたいことはこちらへ。 ここまでアンケートに答えてくれたひとへ:回答へのご協力ありがとうございました! 次年度の担当者、皆さんの後輩へ伝えます。
この度は、進路探求講座を受講させていただきありがとうございました。たくさんお話を聞いていただいて、自分の考えを整理することができました。非常に丁寧な添削をしていただき、ありがとうございました。受講を決めた当初は志望する学校が決まっていませんでしたが、先日進学先が決まりました。城南さんの探究の授業を通して、少しでも自分と向き合えたと感じております。ありがとうございました!	
このような進学探究の場を設けてくださいり、ありがとうございました。集合ワーク内で先生方との面談をしたこと、自分が思っていることを話すことが苦手だということに気づきました。将来のビジョンを人に話してみて気づくこともありますので、もし次年度があれば先生方との面談も引き続き行つていただけると良いと思いました。進路探求講座を受講したこと、自分の進学活動を大きく進められたと思っています。ありがとうございました!	

●特別講座「キャリアⅠC」と「キャリアⅡC」について

・キャリアⅠC

湘南・横浜若者サポートステーションの関連施設である、K2インターナショナルジャパンとの連携講座である。毎時、外部講師としてその職員や関係者を迎えて、本校職員はサポートする形で運営している。講義のみならず、校内外の作業実習、職場見学・職場実習・インターンシップなどを通じて、将来の社会的自立に向けて必要な基礎力を身に付けていく。

令和6年度の年度当初の履修登録者11名のうち、年度末に単位修得するまで活動したのは10名(1名はミスマッチ)。年度当初は、人前での発表やグループワークに戸惑った生徒も、回を追うごとに自信をもって臨むようになった。

夏に例年通り、インターンシップを実施し、10名中7名が参加した。昨年度より高い参加率で、その振返りの文章から達成感が感じられた。本校10月の文化祭で出店・販売の手伝いに6名参加があった。

・キャリアⅡC

卒業年次の就職希望生徒を対象にひらく、就職対策講座（例年開講）。キャリア教育推進グループが担当。

令和6年度の履修登録者は11名で、全員が年度末の単位修得まで活動。令和7年1月現在、内定獲得者7名。就職活動継続者2名。職業訓練校への進学者1名。進学への希望変更者1名。

就職や社会的自立に対する教養講座である。

前期は就職試験に関わることを主として行った。担当教員による講義だけでなく、外部講師によるスーツの着こなし講座やコミュニケーション講座、模擬面接講座を行った。他にもハローワーク訪問や施設見学など行った。

後期からは、基本的に外部講師に講演を依頼。生徒は本校の教室で、社会人として必要なお金に対する知識や、情報モラル、労働法に関する講座を受けた。また、就職先の決まった履修生徒とその担任教諭も交えた座談会の場を設けた。

●就職前インターンシップ（卒業予定者対象）・職業体験（卒業予定者以外）実施について

就職前インターンシップは、就職希望だがアルバイト経験がない、事情を抱えている生徒を中心に、就職後を具体的にイメージするために実施。

職業体験は、働くことを経験する機会、考える機会の創出のため実施。

協力企業は、約30社を令和6年度新規に開拓。就職前インターンシップのべ18名実施、職業体験のべ10名実施。令和7年度も継続していく予定である。

協力企業例

食品館あおば（株式会社ビック・ライズ）、株式会社ロピア【小売】

有限会社光製作所、東京スリーブ株式会社【製造】

谷口運送株式会社、F-LINE 株式会社 南関東支店【物流】

社会福祉法人済生会横浜南部病院、社会福祉法人昂【看護・介護】

TBTソリューションズ【IT】

株式会社共立メンテナンス、リブマックス株式会社【観光】

3 2班のむすび

つぎの文章は、本校で「未来づくり」と呼んでいる、総合的な探究の時間のレポートとして提出された生徒（※令和6年度新入生）の課題文（「入学して良いと感じたこと」）の一部である。

良かったこと	学び直しが出来たこと、高校卒業資格か、得られること、多種多様な先生や、生徒がいること
《理由》 ※100字以上書いてください。1マス目から空けずに、詰めて書きます。	
<p>私は、学力が、低く、高校生の学力より、程遠いの学力でした。横浜修悠館高等学校で、少しいづつでは、ありますか、学力があがっているように、実感しています。高校卒業資格を得たい、理由は、一般企業や、市役所など、様々な、職種につけるから、です。修悠館高校では、幅広い年代の生徒さんが、いたり、色んな先生が、います。良かったところです。</p>	

このような生徒が今後も入学し、通学するなかで、現時点で持っている本校の良さを無くさないように、かつ、時代に即した新しいシステムに移行していくなかでの課題は山積である。また、学力の低さを実感している生徒にも、多様な進路のあり方があるにちがいなく、自分の希望の職種を選びたいという気持ちがある。学びのコミュニティはこうした生徒を担任や一部の職員だけでの支援に留まらず、さまざまな関係機関や協力者・理解者とともにに行っているものであり、良いところを続け、課題点は改善してこの3年間も充実させていく所存である。

【検討委員】

氏名	所属・職名
西原 秀夫	北里大学 海洋生命科学部教授
滝川 幸加	中央大学 文学部特任助教 教育力研究開発機構 研究員
渡貫 由季子	神奈川県教育委員会 教育局指導部高校教育課長
西川 陽平	神奈川県教育委員会 教育局指導部高校教育課 指導主事
稻崎 由衣	神奈川県教育委員会 教育局指導部高校教育課 指導主事

【校内研究担当者】

氏名	職名	担当	所属
米山 教子	校長		総括
堀内 昌之	副校長		総括
小笹 雄二	教頭		総括
柿澤 剛	事務長		会計事務総括
坂井 一郎	教諭	研究主任	保健体育科【キャリア教育推進グループ】
橋本 真人	教諭	データ分析班 班長／Ⅰ班	外国語（英語）科【学校運営グループ】
室井 佑太	教諭	Ⅰ班 班長	地歴公民科【学務グループ】
大澤 浩祐	教諭	2班 班長	地歴公民科【キャリア教育推進グループ】
糸日谷 輝	教諭	Ⅰ班	国語科【キャリア教育推進グループ】
源嶋 大央	教諭	Ⅰ班	理科【学務グループ】
増尾 佐紀	教諭	Ⅰ班	外国語（英語）科【経営企画広報グループ】
結城 佳織	教諭	Ⅰ班	保健体育科【経営企画広報グループ】
新谷 美波	教諭	Ⅰ班	芸術（書道）科【生徒活動支援グループ】
井上 洋介	教諭	Ⅰ班	芸術（工芸）科【キャリア教育推進グループ】
堀内 宏基	教諭	Ⅰ班／データ分析班	情報科【学校運営グループ】
黒木 健太郎	教諭	2班／データ分析班	理科【教育相談グループ】
高取 夏希	教諭	2班	地歴公民科【教育相談グループ】
竹田 昌平	教諭	2班／Ⅰ班	数学科【教育相談グループ】
里崎 志穂	教諭	2班／Ⅰ班	家庭科【教育相談グループ】

データ分析班：生徒の実態に応じた指導・支援に向けた調査

Ⅰ班：通信制における個別最適な学び・協働的な学びの実現に向けたレポート・スクーリングの改善・工夫

2班：多様な背景を有する生徒への校内支援・指導体制の改善・普及

文部科学省「多様性に応じた新時代の学び充実支援事業」

～通信制における個別最適な学び・協働的な学びの実現と発信

及び

多様な背景を有する生徒に対する校内支援・指導体制の改善～

令和6年度（研究初年度）報告書

令和7年3月発行

発行者 神奈川県立横浜修悠館高等学校

編集者 校内研究委員（文科6期）

印刷・製本 山口印刷所



R6文化祭キャラクター
しゅうたん（生徒デザイン）